

## 平成24年度教員研修会・教育講演会収録

(2013年3月5日受理)

### 平成24年度 第1回教員研修会

#### 「復興教育と岩手の教員に期待すること」

小菅正晴 先生

司会：貴重な土曜日ですけれど、わざわざご参加いただきまして、ありがとうございます。それではこれより、第一回の教員研修会を始めます。開会にあたりまして、主催者を代表いたしまして、長澤教育学部長様からご挨拶を申し上げます。

長澤先生：皆さんこんにちは。今日はお出席いただきましてありがとうございます。ここに書かれてあります、復興教育と岩手の教育に期待することということで今日ご講演いただきますのは県教委事務局の主席指導主事兼事務教育課長の小菅正晴先生です。小菅先生には本当にお忙しい中、快くご講演を引き受けてくださいましたことに、まずもって感謝を申し上げますと思います。昨日も附属小学校の研究会で御講演いただいたばかりでして、全体研究会では本当に適切なご助言をいただいております。また今日もお休みのところ一関から単身赴任で来ていただき、岩手大学のために来ていただいております。本当に二日続けてということで、恐縮しております。今日は出席していただいている方の中には、教員セミナーに続いて出席の学生さんもいらっしゃるように見受けられます。今日のテーマは、復興教育と岩手の教育に期待することということですから、採用試験に役立つことも、何か情報提供いただけるのではないかなということ、皆さん期待していらしてのではな

いかなと思います。実は、復興教育に関しては、先週の月曜日に文科省の平野大臣が、被災地に視察にいらっしやいまして、大学側と意見交換をしたいとおっしゃいました。そのときに、文科省の大臣が、ぜひ被災地の大学にお願いしたいとおっしゃったことが、被災地の教育実習を必修化してほしいということだったのです。教育実習という形はなかなか難しいと思ったのですが、地域教育実習の被災地バージョンであれば選択で可能ではないかと思っておりました。ところが翌日大船渡の小学校の校長先生が教職入門の講師としていらっしやいまして、その件についてお話ししたところ、「無理です、少し私たちは静かにしてほしい。」とおっしゃいましたので、そう簡単にはいかないことが分かり、困った状況ではあります。やはり被災地の要請がなければ私たちは出掛けるつもりはありませんが被災地に寄り添う形でわたしたちがどう対応したらよいのか、これから一緒に考えていかなければならないと思っておりました。文科省もそういったことで資質を高められると考えているので、その時に改めて確認したいと思いました。ですから、教員採用試験を受ける方は多分聞かれると思いますし、教員になる上でこういった資質を身につけることが求められているということ、認識していただきたいと思います。6月の初めに、大学改革実行プランというのが発表になり、教員養成は真っ先にまな板の上に乗せられています。その時に、文科省の説明で、県の教育委員会の意向にも沿う形で、お考え下さいとおっしゃっていました。教育委員会と一緒に岩手県の教員の資質を考えていかなければなら

ないという立場にありますので、小菅先生に、今日は復興教育に焦点を絞ってお話をいただきますけれども、これからも継続的に本学の教育にご指導いただきたいと思っています。今日は、お忙しい中来ていただきまして、限られた時間ですけれども、先生のお考えをいろいろお聞かせいただきたいと思います。ぜひ、教員採用で何か役に立つ情報を話していただければ、学生にとってはありがたいなあと思います。よろしく願いいたします。

司会：それでは、この後ご講演いただく先生を井上センター長からご紹介いただきます。

井上センター長：それでは小菅正晴先生のご紹介をさせていただきます。昭和54年に東北大学理学部をご卒業になって、大宮で教員生活をスタートされました。岩手に戻られて、釜石東中学校の教員をされております。以後、川崎中学校、東山中学校で理科指導、生徒指導でご活躍された後、教育行政の方で教育事務所の指導主事、県教委主任管理主事などで先生方のご指導、それから人事管理をされてきました。その後は校長として現場に戻られ、奥州市の中学校で校長として、また、行政のほうとしても、一関市教育委員会次長、それから県教委中部教育事務所長をされ、今年の四月から、岩手県教育委員会事務局学校教育室首席指導主事兼義務教育課長として県内の小中学校の教育活動に関わり、教育行政のトップリーダーとしてご活躍中です。以上、簡単ですが、ご紹介申し上げます。

司会：それでは早速ですが小菅先生よろしく願いいたします。

小菅先生：今、紹介していただきました、小菅です。よろしく願いいたします。今日は90分間よろしく願いいたします。

昨日、ここにも附属小学校の校長先生がご

出席されていますけれども、大学を見させていただきまして、先生方の澁淵とした姿に非常に感銘を受けました。私たち学校教委のメンバーも夜は飲み会に入りまして12時を過ぎてしましまして寝不足と具合の悪い状況でここにきておりますので、途中倒れるかもしれませんがよろしく願いいたします。

先ほど、今日の中身は教員採用試験のお話と言うことでしたが、私は担当ではありませんので、参考になる部分はあまりないかも知れません。教員になってから、岩手ではこういう教員になってほしいということを前面に出しながらお話させていただきます。それから復興に向けてと言うことだったのですが、私の方でお願いしまして復興教育と、にさせてもらいましたので、復興教育と、岩手の先生に期待することを半々でお話しさせていただきます。復興教育は今年新しく課が出来まして、こちらが中心にやっております。細かいところまでは把握していないので概略をお話しさせていただきます。学生向けにお話をさせていただきます。

岩手県の採用を落ちまして、最初に受かったのが埼玉県だったので埼玉県に最初に赴任し、5年間教員生活をし、帰らざるを得ない状況になり、こちらを受け直し入ってきました。ここ10年、私のようなタイプの人が結構いたのではないかと思います。学生さんはぜひ、岩手で教員をやりたいとお願ひしたいところです。というのは、教員採用の枠は、辞めた分をとるのです。ここ過去10年は退職者がほとんどおらず、この3月も県内で四十数名しかおりませんでしたから、そして学級は減っているのに、当然採用はできないという状況が続きました。今後は明るい見通しになっていますので、ぜひ、岩手によろしく願ひいたします。他県出身の方もそのままいていただきたいと思っています。根拠のない話をしているのではなく、今の岩手の教員の年齢層が非常にアンバランスになっているの

です。だいたい、40代が半分を占めています。50代が30%で、40、50代を合わせて80%なのです。なんと20代は4%しかおらず、かなり高齢化しております。ということは、あと10年すると、50代が50%になりますから、岩手の教員は二人に一人が50代ということになります。どちらかという、おじいさんが多くなるというイメージです。今の40代は3000人おりますから、3000人を10年で割ると、1年ごとに300人ずつ辞めるのです。単純に考えて300人ずつほしいのです。たださっき言ったようにそれより少し少なくなりますがいずれあと10年もすれば200~250くらい教員がほしくなるという時代が来ます。今の50代も非常に多く、大体1700人くらいいますから、一年間に170人くらいは平均してもほしくなります。ぜひ、岩手に希望を持ってそのまましがみついただければと思います。もちろん、私たちは意欲のある教員をとりたいため、それに見合うように努力をしていただければ、こちらとしては喜んで採用します。

今日の話は大きく復興教育と岩手の教員に期待することの二本で話をさせていただきます。最初に復興教育についてレジュメに沿ってお話します。実は今回の3.11の大震災の津波でだいぶ犠牲者が出ました。日本全体でも二万人を超えるくらいです。しかし、岩手県の小中学校の先生が引き連れていて犠牲になった児童生徒は一人もいないのです。これは、驚くべきことです。全部で小中学生は岩手県で36名亡くなっています。それは、いろいろな事情があり、不登校で家にいたとか、親が迎えに来て帰る途中で被害にあうとか、そういったことでした。学校の管理下では犠牲者が0であり、これは非常に大きいことです。いかにあのような極限下でも先生方が適切な判断をなされたかということです。岩手の先生はすごいなと思います。資料を持ってきたので見てください。資料1です。これは内外教育という先生方向けの雑誌に去年の5月に

載ったものです。中学生も逃げ、小学生も逃げたということですが、3.11の釜石東中学校での状況です。釜石東中学校はいろいろなところで取り上げられ、釜石の奇跡という言い方もされていますが、その副校長先生に聞きとった内外教育の記事です。中学生も小学生も逃げたと、そして3月11日の避難状況について教えてほしいということに対して、大震災直後、停電で校内放送ができなかったが、生徒は校内放送を待たずに校庭へ走ってくれた。隣の小学校の児童が数日前に起きた震度5弱の地震で校舎の3階に逃げたのと同様、3階に避難しようとしていたが、釜石東中学校の生徒が逃げるのを見て、それに続いた。また、通常の防災訓練では、校庭で点呼をするが、今回の地震では揺れが強く、点呼をしては間に合わないと考え、生徒に第一避難所の老人ホームに走るように命じた。海のすぐ側なのです。峠の方に向かって逃げた。老人ホームには、各クラス名簿が書かれたA版のラミネート加工されたプラカードを常設していた。一番最初にたどりついた各クラスの生徒や担任がそれを掲げ、その場にそれぞれ集まった。混乱していて声が全く聞こえないため、生徒が集まり、担任が生徒の人数を確認した。一人の教員が、石が近くの崖を落ちる様子を見て、防災訓練の崖崩れの前兆に当たると指摘し、さらに高台の第二避難所に移動した。これについてどう評価しますか、と聞かれたことに対して副校長先生は、校庭での点呼の省略と、第一避難所に常設していたプラカードがなければ、波にのまれていたと思う。今思うと、点呼時間の短縮が鍵だったということです。本当に、そういう状況であったのは、わかります。わたしも岩手県で最初に赴任したのが釜石東中学校でしたので、地域的な状況はすっかりわかります。まったくそういう状況の中で判断がいかに正しかったかというのはその通りであります。防災教育とここに書かれていますが、実際、そんなに

毎回防災教育をやっていたわけではないのです。平成18年ころに結構地震があり全国のいろいろな都市を調査した時に、釜石はどちらかという逃げない町、避難指示が出ても逃げられない町として報道されていて、NHKのテレビ番組でもそういう風に紹介されています。そのあとこれではだめだとうことで、市や教育委員会の取り組みを挙げて、やっと、間一髪、被害を免れたということになると思います。この前私も釜石東に勤めていたころの35になる子どもたちが同級生が亡くなったために同級会をやろうと言う案内が来ました。同級生があのかきは180くらいだったと思いますが、5名が亡くなっております。そこでいろいろな話をしました。教え子たちは、鶴住居の子は親を亡くしている子が多く、釜石の犠牲になった人の半分は鶴住居ですから、いかに大変だったかということもわかります。教え子の中には、防災センターが避難所になっていますから、そこに逃げて親子ともども亡くなった人もおりました。いろいろな話を教え子から聞き、表面的には語れるので逆に私は元気をもらったような感じがしました。わたしがいたころは防災教育は出ておらず、私がいた時代であればとんでもないことになっていたなとぞっとしていました。家は県南で宮城県が非常に近いのです。新聞でご存知の大河原小学校は全校生徒108人のうち、74名が犠牲になっています。新聞では見ていたが、自分でその場所に行ってみるべきだなと思い、行きました。行って見てなるほどなあと思ったのは、小学校自体は北上川に沿い、川幅も数百メートルになる大きな川で、学校は平らな土地に建っています。そこで当日、避難しなくてはならないということで校庭に集まり、他の学校よりも早い時間で集まったのですが、そこに集合してから避難場所を決めるまでに40分くらいかかったそうです。そして歩き始めたところに津波が来てしまったということです。わたしもそこに立

ってみたのですが、校庭から見ると校舎が邪魔になって川が見えないのです。津波が来ているというのはおそらく分からなかったのではないかと思います。放送か人が叫ぶのを聞いて、多分把握したと思うのですが、そういう地理的な環境、そして避難する場所をどこにしたかということ、近くの橋の上にしたのです。なぜ橋にしたのかと私も思っていたのですが、行ってみて分かったのですが、橋が結構高かったのです。橋の高さが校舎の屋根と同じくらいで、校舎自体は避難場所となっていましたから、そこではなくてそれよりもさらに高い橋に行ったので分からないではないのですが、一般的には考えにくいです。どうしてかということ、校庭のすぐ横には山があるのです。滑りやすいと書いてありましたが、私も実際に登ってみました。確かに急斜面です。でも、登れないわけではないです。大人の足で校庭から思いっきり走れば、10秒か15秒で山にいけるのです。そこを避難場所にせず、橋の上を判断してしまった。当日はたまたま校長先生が休暇で先生方11人でどこにしようか迷っているのを住民が目撃していました。引き取りに来た子どもは引き渡しカードを使って親に返している。その子どもは助かっているのですけどね。学校に引きとめた子どもたちが被害にあってしまうのですが、11人でどうしようかとなっているわけです。副校長先生がいましたので、普通、校長不在の場合は副校長が判断しますので、副校長が判断したのだらうと思います。先生の判断が、74人の子どもの命を左右してしまった。ということになります。いかにその判断が大きかったかということになります。宮城県はリアス式海岸ではないので平らな土地が多く、逃げる場所がないという地理的な要因が大きかったということになります。宮城県は261名も小中学生が亡くなっており、岩手県の36名の7倍亡くなっています。そういう地理的な環境はあったかなと思います。それからもう一つ

は、大河原小学校もそうだったのですが、前の三陸沖津波のときには、大河原小学校まで津波が来ていないのです。そういう津波のきた過去がないのです。岩手は過去に経験し、学習し伝える機会と言うのがそれなりにあったのですが、これも非常に大きいことだろうなと思います。

災害は必ずやってきますので、歴史をさかのぼっていきますと、例えば、20年前あたりには津波で日本もやられているのです。どこかというと、北海道の南西沖地震、奥尻でやられています。これは今回の大震災と違って奥尻の津波は地震発生からだいたい3、4分で津波が押し寄せました。逃げる暇もないのです。30年前には隣の秋田県の男鹿半島で中部沖地震がありましたね。男鹿半島で子どもたちが犠牲になっています。秋田の山の子どもたちが楽しみにしていた遠足に海を見たいということできていたのです。そしてバスに乗っている最中で地震が来て、バスに乗っていればあまり大きくは揺れを感じませんよね。そしてちょうど男鹿の海辺に着いた。子どもたちを遊ばせたところに来たのです。住民たちは、それを目撃していたのです。これもたった30年前であります。岩手の場合には明治三陸大津波というのがありました。これは明治時代の話であります。新聞で見ると、震度が3、4くらいのだと言われてます。何日か前に地震がありましたよね。あのくらいの地震です。それで一気に来たのです。防ぐのがなかなか難しい。当時20000人を超える死者数を出していますから、今回の地震よりも少し多いくらいの犠牲者を出しています。歴史をさかのぼるといろいろあります。これを他人事だと思わずに、自分の中に取り込むことができるのかということが大切です。大河原小学校も津波の情報は入っているのです。自分の学校に来ると言う考えに至らなかったところがあるのではないかと思います。1000年に一度と言われてます。M9

クラスの地震は。1000年とは一口で言いますが25歳で子どもができたとすると、25で1000を割ると40ですから、40世代後に多分同じようなスケールの津波を体験することになるだろうと思います。先行きの長い言い伝えが絶対に必要だと思います。わたしの亡くなったおばあちゃんは、悪いことをすると、「もうこくっぞ！」と叱ったのですね。わたしはもう何が何か分からず、怖いものが来るのだろうなとしか思っていなかったのですが、これは蒙古、モンゴルのことで、1200年代鎌倉後半に蒙古が2回文永や弘安に九州に攻めてきたその恐怖がもの凄かったのしょうね。それが伝わってきて岩手とかいろいろなところにも伝わっています。その言い伝えと言うのは800年も経つのですが、結構伝えることができないわけではないのです。今考えてみると学校でおばあちゃんも教えられるわけがないよなと思いつつながら、多分言い伝えられてきたものではないかなと思います。ここまで話が長くなくても震災についてはぜひ伝えていきたいものだなと思います。これは今回は津波ですが直下型の地震も怖いのです。地震だけでなく災害と言えば地震以外にも大水もあれば火山もあるかもしれない。いろいろな災害が考えられます。そういう災害に対して、防災教育をいかにやっていくかということが必要になってくるのではないかと思います。ただ、学生さんに話しておきますが、自然災害はものすごいスケールですね。でも一番大きな部分は戦争ですよ。戦争は一番大きい災害です。沖縄では今日67年経った慰霊祭のような式典をやっているらしいですが、戦争のスケールと言うのは本当にすごい。第二次大戦は日中戦争から太平洋戦争まで日本だけで310万人死んだと言われてます。今回は2万人なわけですから、戦争ではその15倍亡くなっているわけ。世界全体では6千万と言われております。そのうち、ナチスによって虐殺されたユダヤ人が六百万人と言われ

ています。日本の死者の倍なんです。いかに、人間が自ら作り出した戦争によって仲間を殺しうる災害かということはスケールの大きさから考えても私たちはしっかり考えていかなければならないなと思います。

さて、復興教育の全体像について見ていきたいと思います。資料を見てください。資料の2です。復興教育のイメージと言うのは、学生さん向けに簡単に作ってきたものですから、県教委が外に出しているものではありません。復興教育と一口に言いますが、最終的な目標は人づくりであります。郷土を愛しその復興や発展を支える人材を育てるという人づくりが復興教育の目的、目標です。教員採用試験は、復興教育だけは覚えておいた方がいいかも知れません。柱は2つあります。一つは、自らを守り、他者を支えるために身につけたい知識や技能を持っている人づくりをしたいということです。もう一つは、人としての生き方、自らのあり方を考える態度を持った人づくりをしたいものであるという、二つの構造があります。一つ目の知識や技能は、いわゆる防災教育です。防災教育の中身であります。自然、社会、技であります。自然と言うのは、災害発生のメカニズム、教科でいえば理科で学習する中身です。次の社会と言うのは情報の活用と伝達、社会科で関係します。技は学校で身を守るということですから、避難の方法や経路を確認する、あるいは、被害を最小限に留めるための技能を身につけるためのものであるということであり、避難訓練がこれにあたります。大きく、自然、社会、技と言うのを防災教育で身につけさせたいというのが一つであります。もう一つは、人としての生き方、自らのあり方を考えると言うことで、心情的な、被災があった後の心や行動の部分です。我々は、命、そして絆と言うことで分けていますが、命と言うのは、まさに命の尊さを考えること、そういうたくましさといったことでもって命を守っていく

ということになります。命はかけがえのないものであるということ、そういう認識を培っていききたいということでもあります。それからもう一つ、絆は、今度は、他者との関係であります。家族や地域の支え合いと言うことに関する心や行動を養っていききたいです。今回の災害では家族、地域の絆が非常に大きかったと思います。こういった部分を大きく分けて二つですが、これをもって人づくりとしたいと思います。これが復興教育の全体構造のイメージであります。

右側に書いてあるのは、それぞれがそれをどういうところでやっていくかということを書いています。防災教育とか、各教科でやるとか、他地区との交流、いろいろな部分でそれを行うことが出来ます。現在、県内の各学校では、それぞれの学校の実情に合わせて、こういった復興教育を落とし込んでいます。これが一年くらいするとだんだんかたまってくると思います。そうすると県としては、やるべきことはもっとこういうことだということを議論化していききたいということです。レジュメの(3)に全国の動きというのを書いていますがいくつかだけ紹介しますが、いろいろな動きが出ているのは分かりました。速い県は速いです。特に津波が予想される県では速いです。感心するばかりではいられないですがすごいです。三重県、岐阜県は動きが速いし、3.11の震災があって5月には三重から先生方が何十人といらっしゃる、入っているのです。支援しながら、帰った後にその先生方から記録を撮り、それをまとめて、いわゆる支援のプロジェクトチームを作ってそれをまとめて方針を出して指針としてすでにだそうとしています。三重は新聞にも載りましたが防災ノートと言うのを子どもたちに配り防災教育を実践しております。こちらに支援しながら、行政も学校も、自分たちのところが被害にあったらどうすべきか常に考えているのです。それは、凄いなあとと思います

ね。三重は東海地震や東南海地震が間違いなく来ますから、下手するとダブルパンチになるかもしれませんから、そうしたときに岩手や宮城がどうやってきたか盛んに考えています。それから東京は、いち早く3.11を忘れないという副読本を作りました。東京はご存知のように帰宅難民の問題が非常に多いです、首都直下型の地震が来る可能性があるということで、東京都議会が3.11後の試走と言うことで考え方をまとめて議会に提案し、対策を練っています。東京の考え方は、自助、共助、公助というものです。自助とは、自分から助けると書きます。共助は共に助ける、公助とは公に助けると書きます。災害があったときには、まずは自分の身は自分で守りなさい、そして家族、地域で助け合いなさい、最後に行政がかけつけるというものです。東京は、まずは自助で3日間自分で何とかしなさいと言う考え方です。災害があったとき、3日間は自分で生き延びなさいということです。そして、次に、共に助け合いなさい。会社員は家に帰らないで、会社にとどまり、備えていた水や食料で地域を援助しながら自分たちも生き延びなさいと。そのあとに行政がやってきて救援物資を与えてくれますよという考え方です。

平成七年に阪神淡路大震災を経験しましたが神戸はそのあと震災を忘れないという冊子を作り、ずっと教育をしています。しかし、やはりすこしずつ風化していくと神戸の先生に聞きました。岩手は復興プログラムと言うのをすでに作成し、各学校に配布しております。一年間でさっと作ったので改訂が必要です。実践論も増やし、改訂版を今年度末に作る予定です。と同時に、子どもたち一人一人に行きわたる副読本も平成25年度末には作る予定で進めております。全国の動き、岩手の動きをお互いに情報交換をしながら防災教育を進めてきたいと考えています。それでは用意してきたDVDがありますので、これを見

ます。震災当日の様子は入っていますが、何回も見たと思いますのでカットします。

(DVD)

後半の部分だけ見ましたが、河南中学校の先生方と生徒の震災後のことを見ていただきたくて、撮りました。復興のことについては、以上で終わります。

後半にはいります。大きなテーマの2つ目、岩手の教員に求められることということでお話をさせていただきます。初めに、国や県は、どのような子どもを育てようとしているのかということです。皆さんとともに確認をしたいと思うのですが、これは資料の3、4を見てください。採用試験にかなり関係があります。3には学校教育法と小学校の学習指導要領を載せました。この中に、どんな子どもを育てたいかが書かれています。学習指導要領の方が分かりやすいのでそちらから見ていきます。児童に生きる力を育むことを目指し、と書いてあります。これが国としてどんな子どもたちを育てていくかということの中身です。生きる力とは確かな学力、豊かな人間性、健康と体力です。つまり、知、徳、体を生きる力として捉えています。そのなかの確かな学力は学校の中でどういう目標を持ってつけていくかが次に書かれています。基礎的、基本的な知識や技能をつけ、これが一つ目です。二つ目が、知識や技能を活用して問題の解決をするための思考力、判断力、表現力の育成、三つ目が主体的に学習に取り組む態度です。これが確かな学力の中身なのです。学力の要素です。あえて出したのは、法律ができるまで様々な考え方があったのです。でも今は、一般的に教育界でこれから学力と言われることは3つと決めてしまって、その土台になるところを考えていこうということです。というのは、法律として決めていますから、法律として縛らざるを得なかった

というか、そこからスタートする形になっています。生きる力の中身は3つ、そしてその中の確かな学力の要素がまた3つと、いうことになります。この中で特徴的なのは3つ目の主体的に取り組む態度と言うことなのです。ここは、学習意欲ということですが、学習意欲も学力に入れるということです。様々な議論がありましたが、これからは意欲も学力のうちであると法律で規定することになりました。学校教育法は上位法で、だいたい同じ内容が書かれています。学力の定義です。それに基づいて、岩手県ではどういう子どもたちを育てようとしているのかということです。これは実はこれからの岩手の義務教育というまとめ方をしています。平成21年3月に岩手県教育委員会として出しました。今後10年間、これからの岩手教育としての考え方に基づいて子どもたちを育てていこうということになります。内容は、知、徳、体を総合的に兼ね備えた社会に適応する能力を育てる人間形成と言うことになっています。それを細かく噛み砕いたのが1, 2, 3, の部分です。1は生活面における基礎基本ですがここが国の生きる力の徳と体にあたります。2番は学習面における基礎、基本ですから、これは知にあたります。岩手独自で重点的にあえて出したのが、社会人になることの意義や理解です。これは国の方針に明示されていなかったのですが岩手としてはこの部分をより強く、鮮明に出してきたということになります。社会人になることの意味と理解と言うのは、キャリア教育です。岩手県ではキャリア教育指針と言うのを出しておりまして、キャリア教育の土台の部分と言うのは総合生活力だと言う言い方をします。健康体力、豊かな人間性、確かな学力です。聞いたことがあるなと思ったと思いますが、これは生きる力であります。総合生活力と言うのは生きる力、その生きる力の上に人生設計力というキャリア教育があるという形の構造です。これが、これからの

岩手の義務教育の大きな方向性になっていると考えてください。

では、どんな方向の子どもにしようかご理解いただけたと思うので次にはどのような先生を岩手では期待しているかということになります。合計4つあります。(2)の授業改善の視点と書きました。授業で子どもたちに力をつけられるようになってほしいというのが一番最初の願いです。ですから、私は授業が下手だけど教員になりたいというのはいいのですが、授業をやりたくないと言う人はだめです。授業は欠かせませんので。授業の中では2つのことをお話しさせていただきます。まず、①分かる授業、力をつける授業へのこだわりと書きました。これは、資料の5, 6を見てください。5は、平成16年に岩手県内の保護者2千人、教員1千人にアンケートをとりました。いったいどんなことを教員に期待しているのか、保護者と教員それぞれにとりました。その結果を見ますと、分かりやすい授業を出来ることが、保護者は期待するし、教員もそれを大事だと思っているということで、両方ともトップです。保護者のニーズ、まさに顧客のニーズの一番高いのは、先生に分かりやすい授業をしてほしいということ。6は、では現状は？ということですが、22年の全国学力調査の全国の学習状況のことです。算数と数学だけ取り出していますが、算数の勉強は好きですか？算数の授業の内容は分かりますか？というものですが、肯定的な答えをしたのは小学校中学校それぞれで、授業の内容はよくわかりますかということに対して小学校は80.1%、中学校は56%なのです。岩手県です。全国では、78%、65.7%となっています。岩手県と全国との差は、小学校は全国よりも高いのですが中学校は全国よりも低くなっているのです。ここにはあえて書きませんでした。小学校は全国で12位です。ところが中学校は47位です。47しか都道府県はありませんので、そういう意味です。



算数の勉強は好きですかという質問は、偶然ですが、同じ順位なのです。中学校の数学の先生は何をしているのかということになりますが、数学の問題だけではないのです。後で話しますが、好きですか、分かりますかと言うデータを示したのは、勉強が分かりますか、好きですかということには実はかなりの相関関係があるのです。勉強は、分かるから好きになり、分かるから出来、分かるから楽しいのです。分かるというのは、スタート地点なのです。だからこそ、分かる授業をしたいということです。岩手県は、分かる授業ができる先生を育てたいと思っているのです。

学力を上げるのは、授業だけではないのです。分かる授業にするのが一つと、もう一つはやはり学習習慣です。この二つが、岩手県では学力向上の両輪だと考えています。

どんな先生が分かる授業ができるのか、それが②です。子どもの様子が見られる先生、見られない先生です。簡単にいますと、自分がやった授業が子どもたちに分かったかということをしっかり確かめられる先生でなければなりません。わたしはいろいろな先生を見ていますので、カリスマ的な授業の上手な先生もいます。とても下手な先生もいます。下手な先生は、指導が不適切な先生です。指導力不足と言う言い方はあまりしなくなりました。この先生方を見ていくと、共通な点があります。生徒が分かって分からなくても勝手に進めると言う人が多いのです。自分が教えたことが分かったかどうかチェックするのが、上手くなるための条件です。子どもを結局見ていないのです。子どもの反応を見て授業のやり方を変えていくというのが授業がうまくなる条件です。誰だって教員になったばかりのころは授業が下手です。人の授業を見たり自分の授業を見てもらったりして、こういうやり方では子ども達は分からないのだと、少しずつ変えていくわけです。まさに授業一時間一時間を、P D C Aの考え方

で変えていくのです。P D C Aというのは、plan,do,check,act ですね。ぱっとやれ、どんとやれ、ちゃんとやれ、あっさりやれということですね。(笑) これを一時間一時間やっていくと、必ず授業は上手になっていきます。上手になれないのは、生徒が分かって分からなくてもどんどん次に進めてしまう先生です。そういう風な意識を持って、授業に取り組む先生になってほしいということです。

それから(3) どのような先生を求めるかの二つ目ですが、子ども理解、可能性への信念と書きました。あえて信念と使わせていただきました。子どもは将来必ず良くなると、あるいは、子どもは必ず良い面があるという考えでなく信念を持っていただきたいのです。確信を持っていただきたいのです。無条件にこれを確信として持っていただきたいのです。そうでないと次に進まないという考え方です。人間は白か黒かではありませんから、どんなに善と言われる人間にもよこしまな部分がありますし、どんな悪い人間の中にも良いところは必ずあるのです。そういう人間観を持ってください。どんなに難しい子どもや問題な子どもが目の前にいても、必ずこの子どもに良い面があると思う、あるいは将来きっと必ず良くなるはずだと言う目を、教員には持っていただきたいです。

先ほど釜石東の話をしましたけれども、生徒指導上は比較的良い学年でしたが、いつも怒りつけていた子どもがいたのですが、その子と釜石で飲みながら、先生、俺震災の時に、4人助けた、と。津波が来たとき、両親がばらばらに車の中に居たり流されたりしたのだそうです。たまたまその側において、一人は波が引いたときに助け、もう一人は、手を離れたらアウトだという状況の中で引っ張り上げた。そのほかにも地域の人を2人助けたと。本当かと思って他の人に聞いてみたら本当なんです。一番の問題児だったのですが、やっぱりこういうところで一番に力を発揮してく

れました。わたしは、涙が出るほど嬉しかったです。やはり人間とはこうではないかなと。小学校の時によくなっても中学校でよくなるかもしれないと。学生時代だめでも、大人になってから人助けをするような人になるかもしれない。そういう確信を持っていただきたいということでもあります。

ピグマリオン効果というのがありますね。簡単に言うと、2列のうち、一つに先生が「勉強ができない、ばかだ」と言い続ける。もう一つの列に、「本当にいい子だね」ということを言い続ける。平均点が同じでも、半年後に調査してみると、褒めた方が本当によくなってしまふ、というのがピグマリオン効果です。子どもたちにはこういう接し方を是非してほしいと思います。資料の6を見てください。自分には良いところがあると思えますか、という質問に対してです。岩手県では、肯定的に捉えている人の割合が全国より低いのです。小学校は31位、中学校は44位なのです。非常に謙遜しているというか、県民性なのでしょうね。世の中に出た時に自分を主張する機会もありますし、自分に対する自信や確信がなければやっていけないこともあります。これは育てたいと思いますね。

平成17年の高校生的心と体に関する調査で、私は価値ある人間だと思うという質問に対して、まったくそうだ、と答えるのは7.5%しかいないのです。アメリカは57.5%です。中国42%、韓国20%。同じ儒教の影響を受けた国の中でも日本は格段に低いのです。私は努力すれば大概の事は出来るという質問に対して、日本は8.4%、アメリカはなんと60%。ちょっと高すぎますよね、うぬぼれと言いますけれど。圧倒的に日本は低いのです。私は先生に優秀だと認められているという質問には2.2%しかいません。アメリカは40%です。日本はあまりそうではない、全然そうではない、を足すと、80%にまで上ります。10人に8人は、私は先生にだめな生徒だと思われて

いると思っているのです。それは問題かなと思います。自分の評価は、他者の評価によって作られると言われているから、駄目だと言われ続けると、本当に自分はバカなのだという認識を持ってしまふ。良い子だねと言われ続ければ、自分は良い子なのだと思い続けるのです。自己評価に必ず直結するということになってきますから、いかに日本の先生が、子どもたちに良い子だねと言っている場面が少ないかということになるのです。もっと肯定的に日本の先生方は見るべきだということになります。日本は自己肯定感がかなり低いことがさきほどの結果からわかります。世界の中で日本の自己肯定感は低く、日本の中でさらに岩手は自己肯定感が低いので、岩手県は、世界の中で自己肯定感がかなり低い地域だということになります。ぜひ子どもたちの良さを認めていきたいなということになります。

(4) 社会人としてのコンプライアンスです。ここは社会人としてあるべき姿をきちんとしましょうね、ということです。挨拶、時間、整理整頓。社会に出るいろはです。必ず出来るようになっていただきたいということです。挨拶も明るくさわやかに出来るように努力してください。時間も、遅刻することが絶対にないように。信頼を失いますから。整理整頓は結構難しいのですがきちんとしておくことが大事です。現場に出ると、机の上がぐちゃぐちゃになっている先生がよくいるのです。あの文章は？といっても出てこないのです。分類をきちんと出来る先生は頭も整理され仕事が速い人が多いです。当たり前のことですが当たり前のことをやることは非常に大事なことです。凡事徹底という言葉を知っているでしょうか。イエローハットの創業者、鍵山秀三郎さんが良く言います。この方は日本を美しくする会と言う組織を作っていて、トイレ掃除を随分いろいろなところに回って行っています。一関の講演にお呼びした時に

接待をしてお話をしたのですが、オーラがありますね。着ている背広は何となく安いのかなと言う感じもしますが、オーラがあり、私のような下の者にも丁寧な言葉を遣ってくれます。私の話も真剣に聞いてくれるのです。感動しました。やはり違うなど。この神山さんが、凡事徹底をすることで、人間と言うのは磨かれる、ということです。そうすると、かなりのことが出来るようになります。鍵山さんが、自分ができることは、日本を美しくすることだということだそうです。これだけ、この凡事だけを徹底しているから、あれだけの大きな事業になったのだと言っていました。学びたいものです。コンプライアンスと言う言葉を聞いたことがあると思います。教員には、不祥事、飲酒運転あるいは体罰を行ったり、あるいはわいせつ行為やセクハラを行ったりと、法律に触れるようなことをたった一人の教員が行うと必ず新聞に出るのです。そしてそれを見た県民は、先生がたはみんなそうなのかなと思ってしまうのです。一人の不祥事が全体の印象に繋がりますので、法令を守る、モラルの向上は教員にとって絶対に必要なことであります。よろしく願いしたいと思います。

(5)に人間としての幅の広さと書きました。向上意欲、学びを持ち続けることをお願いしたいなと思います。学生時代はたったの四年間です。教員生活は35年間です。学生時代に出遅れても、教員生活で努力を重ねれば絶対に良い先生になれますから、そういうつもりでやっていただきたいと思います。向上心はグラフで言うと傾きです。今の能力は数値でありまして傾きが大きければ大きいほど能力は伸びていきます。向上心をぜひ持ち続けていただきたいなと思います。チャールズダーウィンがこういうことを言っています。最も強いものが生き残るのではなく、最も賢いものが生き延びるのでもない。唯一生き残ることが出来るのは、変化できるものである。

と、進化論のダーウィンは言っています。自分を向上させ、変化させていくということをいつまでも持ち続けるような先生を、岩手としては欲しいと思います。



## 平成24年度 教育講演会

「長編ドキュメンタリー <sup>ひのえまた</sup> 檜枝岐歌舞伎  
やるべえや ～古き良き心を福島から世界へ」  
安孫子 亘 監督

木村先生：岩手大学教育学部では年に一回学部主催で講演会を主に学術講演会と銘打って一昨年、昨年と行ってきました。今年は、ご縁がありまして、福島の檜枝岐歌舞伎に関するドキュメンタリー映画をお撮りになった安孫子先生をお招きして、講演会と映画の上映会を行うことになりました。最初に、上映と、講師の紹介を兼ねまして、学部長の長澤先生から一言ご挨拶をいただきたいと思います。

長澤先生：皆さま、こんにちは。教育学部の長澤と申します。今日は休日の貴重な時間を割いて足をお運びいただきましてありがとうございます。今、木村先生から紹介がありましたように年に一回、本学部主催と言うことで、講演会を企画していますけれども、映画の上映会を兼ねて、しかも監督さんの解説付きで、こういう企画をしたのは初めてでございますので、本当に皆さまは良いチャンスを見付けられたと思っています。安孫子亘監督には、今回の企画を申し込みましたところ、本当に快くお引き受けいただきまして、まずもって感謝を申し上げたいと思います。

挨拶と一緒に、安孫子さんの紹介を兼ねてということですので、早速簡単に紹介させていただきますと思います。皆さま、配布資料を参考にご覧いただきたいと思いますが、この資料に簡単に監督のご紹介はありますけれども、ここを補足しながら紹介させていただきますと思います。安孫子亘監督、1959年北海道小樽生まれでございます。ここにNHKのEテレ作品が紹介されていますけれども、その前にも実に多くのテレビ局の開局記念番組として作品を手がけられていて、

数々の賞を受賞されていらっしゃいます。NHKのEテレの作品につきましては、1995年から97年までアフリカのケニアに移住されて、その間に撮影、制作に取り組んだということで、その経験に基づいてこの作品が出来上がっているということだと思います。98年には栃木県に移住とありますが、那須高原に翌年日本初めての映像ギャラリー「ミルフォニー」というのを開設され、ここを拠点にその後の制作活動をされていらっしゃいます。2006年からはケニアの貧困な子どもたちの自立支援サポートも展開され、非常に多面的にご活躍なさっています。栃木を拠点として作られた作品として、資料の中いくつか示されていますが、この作品をご覧になりますと、自然をテーマとして作品を手がけられているなということは皆さまもすぐに理解いただけるのではないかと思います。2009年から今回上映されます檜枝岐村を対象にしまして、制作活動を始められて、3年間に渡って活動を記録されて、2011年に今回の「やるべえや」を完成されたということです。自然をテーマにされて、さらに、今回のテーマは「檜枝岐歌舞伎 やるべえや」ということで、ここにどんな繋がりを持っているのかなということ、私興味を持ってYouTubeの解説を見ました。そこに書かれていることをご紹介しますと、「尾瀬の大自然に囲まれた檜枝岐村の古き良き日本の姿を見た。檜枝岐歌舞伎を守り続けていく、その情熱と感動の記録である。」と、記されておりました。そして「何があろうと日本の文化、歴史、営みを守り続けることをテーマにしていく。」ということで、ここに至りまして、このメッセージのキーワードになるのは、風土を大切に命を育むということではないかと私自身は今感じております。この辺についてはまた監督に解説いただきたいと思いますが、「日本の文化、歴史、営みを守り続ける」というテーマに行きあたりましたときに、実は大震災後の我が国

の人々の生き方というのがここに示されているのではないかと考えております。価値観の大転換が求められている中で、教育学部の事情に触れますと、教員養成改革ということで、資質向上を求められています。実は改革と言うのは新しいエネルギーを作り出すのには相当なものが必要なんですけれども、もっと必要なものは、守るべきものは何かということを見据えて、守り続けていくこと、私はこれが本当の改革の意味ではないかと考えております。そういった意味で、教育学部関係者の皆さまも今日は大勢いらっしゃっているかと思いますが、それぞれの立場で、監督のメッセージを受け止めて、震災後の被災地を私たちがそれぞれの立場でどう支えていったらいいのか、どう生きていきたいのかということを考える場にさせていただけたら幸いです。

監督に解説をいただきながら映画を鑑賞できるという機会は滅多にない機会ですので、私もとても楽しみにしてまいりました。時代は、感動体験を共にするということが求められています。今日ご参加の皆様と感動体験を共にすることを大変うれしく思っております。最後までお付き合い願いたいと思います。本日はご出席いただきましてありがとうございます。よろしく願いいたします。

木村先生：長澤先生、ありがとうございます。今日の前定としまして、まず最初に安孫子さんからお話をいただき、それからすぐに映画の上映に入りまして、そのあとまた安孫子さんに補足をさせていただき、最後に質疑応答として締めさせていただきたいと思います。では、安孫子さん、よろしく願いいたします。

安孫子監督：安孫子です。今日はどうもありがとうございました。これから見ていただく映画は、舞台が福島県の檜枝岐村、福島が一番奥の、新潟との県境の非常に小さな村です。人口が630人程度で、そこに、260年以上も、ず

っと、昔のままのスタイルで、農村歌舞伎が残っている。これを、いかに、伝承されてきたのか、そして若い人たちにどうやって繋げていくのか、この伝承を映像化できないかということを狙った作品です。まったく演出はありません。何気ない、素朴な檜枝岐村の暮らしの中をちょっとだけ抜き取っただけの作品です。どうぞごゆっくりご覧ください。

(映 画)

木村先生：ありがとうございます。安孫子監督から、一言お話をいただきたいと思います。

安孫子監督：ありがとうございます。子どもたち頑張ったでしょう。初めはどうなるかと思いましたが上手いききました。これは花駒座の俳優、スタッフ、そして子どもたちが作り上げたかけがえのないもので、私はカメラを持って立ちあうことができ幸せだったと思います。この作品を撮るきっかけになったのは伝承を残すということで、この檜枝岐村に入っていったのですが、これは、歌舞伎の演技やセリフを、単に教えていくのが伝承ではないのだということに、私は、撮っている間に、だんだん気付かされました。それは、地域の大人が、子どもたちに温かく接する気持ち、そしてみんなで630人しかいない小さな村でみんなで子どもたちを一人一人育てていくことで伝承に繋がるということに気付かされました。そして練習の中に道徳的なことが入っています。セリフは回数を重ねれば誰でも何とかできますが、子どもたち、中学生は、中学校を卒業すると高校がないので親元を離れて生活しなければなりません。そのために社会に出て困らないよう、おじいちゃんの世代の人が歌舞伎の練習の中に道徳的なことが知らず知らずのうちに入っているということは、なかなかできません。先生たちも気づかないことをおじいちゃんたちが教えて

くれます。日本にはずっとあったことだと思います。現代になって薄れてきてしまいました。檜枝岐のようなこういう貴重な村がまだ日本にはあるのだということがこの映画を通して皆さまに知っていただきたい、そして、全国で上映しておりますので、こういう凜とした教えを出来る大人たちがいる村がまだまだあるということをいろいろな方に見ていただいています。そして文化祭本番、子どもたちは立派に演技ができていました。その文化祭が終わって子どもたちは控室で話してくれました。「いつか、この檜枝岐村に帰ってきて、歌舞伎をやりたい。」この瞬間にわたしは、3年間に渡って撮った作品から、伝承することが出来たのではないかと思います。これは2009年から3年間、檜枝岐村に通い撮影しました。震災の直前に撮影が終わり、震災の真っ最中に編集しておりました。なんとか完成までこぎつけました。しかし気がついたときには、普通に暮らしているところを追い出される人たちがいたのです。今見ていただいた伝承文化は、今皆さんが安心して暮らしていける地域がずっと続いて行かなければならないのです。こういった文化は岩手県にも、神楽、獅子踊り、黒沢人形歌舞伎など、いろいろな歌舞伎があり、そういったものも、安心して暮らせる地域がなければ続きません。ですから、こういうことを映画を通して、故郷の大切さを伝え、そこを追い出されることだけは避けたいということを伝えるためにいろいろなところでメッセージを発信しております。被災地によって悲惨な映像が流れていますが、福島状況がありますので、世界に浸透している「FUKUSHIMA」の文字から、世界中の人は福島にあまりイメージを持っていません。ですから、逆に、きれいな福島の自然や文化をもって世界中の人の福島のイメージを私は変えていきたいと思っています。福島を応援するためではなく、これからの会津を中心とした作品を作り続けて、いろいろな

ところでいろいろなメッセージを発信して最も美しいドキュメンタリーを目指していきます。檜枝岐村と言うのは、小さい村ですが、若い人たちが戻ってくるのです。びっくりするほど、若い人たちがいます。花駒座の座員の一人も、大学を卒業した方で、この彼の働きかけによって実現しました。彼も檜枝岐村で育ち、そして今のように一度村を中学卒業後出ますが、また戻りました。今は檜枝岐村で生活しております。こういうことが本当の伝承、自分たちが生まれ育った精神をみごとに子どもたちに植え付けることができたと思っております。本当に今日は貴重な時間に見に来ていただきまして、ありがとうございました。





## 平成24年度 第2回教員研修会 (1)

「大津波を生き抜いた子どもたちの奇跡ではない  
釜石の軌跡」

加藤孔子先生

新沼：こんにちは。今日は土曜日にも関わらず、足元も悪いところ、ご参加いただきましてありがとうございます。南は一関からのご参加をいただきましたし、北は岩手町からもご参加をいただきました。ありがとうございます。定刻になりましたので講演会を進めさせていただきます。全体進行を務めさせていただきます、附属教育実践総合センターにおります新沼と申します。どうぞ、よろしく申し上げます。それではさっそく講演会の方を進めさせていただきます。第2回になりますけれども、教員研修会を始めます。開会にあたりまして、岩手大学教育学部、長澤由喜子学部長からご挨拶申し上げます。

長澤：皆さんこんにちは。本日は土曜日という貴重な時間を割いていただきまして本当にありがとうございます。今年は冬が厳しいので、一番心配していたのは雪が降らないかということだったのですが、とても暖かくなりました。ところが、雪が溶けだして、氷の上に水が溜まってとても歩きにくい状況になって、お出かけの際には滑らないかと気を使いながら歩いていらした方が多いのではないかと思います。ただ、小岩井では雪まつりが始まっていますので、暖かさと雪像が溶けないか、ちょっと心配しています。雪まつりに行かずに今日は講演会にいらっしゃって大正解だったと思います。

今日は「大津波を生き抜いた子どもたちの奇跡ではない釜石の軌跡」というテーマと、それから土井先生には「想定外の自然現象への理解と備え」ということで、お二人の先生に講演をお願いしています。まずもって、お

二人の先生がお忙しい中、ご講演を引き受けてくださったことに心から感謝申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

加藤孔子先生は、みなさんが耳にしていらっしゃる釜石の奇跡の当事者でいらっしゃるということで、そうした方の声を生で聴けるというのは本当にめったにない機会ですので、それを楽しみにお出かけくださった方もとても多いのではないかと思います。昨年6月、NHKのスペシャルで特集されて、子どもたちの素晴らしい想像力と判断力がそういった奇跡を招いたということと、もうひとつは、子どもたちがそのあとで言っていることをディレクターがホームページに書いているわけですが、「僕たちはふつうのことをやっただけで、特別なことをやったわけじゃない」ということを子どもたちがさりと言っているのけているあたりがすばらしいと、これこそが教育の賜物だということを語っているわけです。教育の賜物ということで、その教育を総指揮していらした校長先生を今日はお招きしていますから、ぜひ教員になるために大学生の方にも聞いていただきたいと思いましたが、たぶん今日ここにお集まりの学生の方はいいことを聞いたという思いで今日はお帰りいただけるのではないかと思います。

そして、お二人目の講師の土井先生は昨年の研修会でもお願いしたのですが、こんなに専門家の話は面白いのかと思うような、地質学の立場から東日本大震災について本当におもしろいお話をしてくださいました。歴史的な流れの中で火山と地震の発生について資料を示してくださりながら今後の予想についてお話いただいたのですが、身を乗り出して聞いていた記憶があり、本当におもしろいお話でした。今日のお話は火山に特化してということですが、また専門の立場から興味深い新しいお話を伺えるのではないかと思います。楽しみにしてまいりました。

今日は「防災教育」ということがキーワー

ドになっていますけれども、たぶんお2人から本当に豊かな経験に基づいて多くの示唆をいただけるのではないかと思います。4時10分くらいまでを予定していますけれども、最後には質疑応答の時間をたっぷりとりますのでたくさんのご意見、そしてご質問をお出しいただきたいと思います。最後までお付き合いいただきたいと思います。改めて今日ご出席していただきましたことに厚く御礼申しあげまして、主催者側からの挨拶といたします。本当にありがとうございました。

新沼：今、長澤学部長さんからもご紹介いただきましたけれども、この後ご講演をいただく2人の先生をさらに詳しく井上センター長さんよりご紹介させていただきます。

井上：こんにちは。これから御講演をいただく、最初に加藤孔子先生につきましてご紹介をさせていただきます。

加藤先生は盛岡市のご出身です。岩手大学教育学部をご卒業されまして、教職に入られました。初任校は釜石市立平田小学校です。このときから釜石にはご縁があったようでございます。その後、雫石、盛岡市内の小学校で主に道徳教育や学級経営で目覚ましい活躍をされまして、県立総合教育センターの研究員となられて、県内学校教育の指導にあたられました。そして今度は教頭として現場に戻られ、北上市、盛岡市の小学校に勤務され、平成20年4月から釜石小学校の校長に着任されました。釜石小3年目の3月に、東日本大震災に見舞われました。この後、ご講演をいただきますが、全校児童184名ほとんどが大地震の直後に積極的に避難行動を起こし、大津波による犠牲者を一人も出ませんでした。マスコミなどからは「釜石の奇跡」と言われていますが、加藤校長先生は「子どもたちのミラクルではない、足跡としての釜石の軌跡である」と話していらっしゃいます。昨

年の4月からは滝沢東小学校校長としてご活躍中でございます。

続いて、2番目に紹介させていただきます、土井信夫先生です。土井先生は静岡県のご出身です。東北大学理学部地学科、地質学古生物学教室をご卒業されて日本重化学工業で地熱発電所建設のために、監査に従事されました。その後、岩手県総合防災室で火山対策に従事され、2009年より、岩手大学教育学部教授として現在に至っておられます。主な研究分野は火山と活断層、山脈と河川地形の研究、そして、火山・地震・津波災害と防災ということです。昨年2月の教員研究のシンポジウムでも「地震・津波調査と安全性について」というご講演をいただき、多くの方に感銘と示唆を与えていただきました。質疑応答のときに多くの質問があり時間が足りないほど充実したお話をいただくことができました。今日も、大震災後にどのような変化が起きているか、その時に備えるのにはどうすればよいかなど、きわめて関心が高い事柄について話しいただけるかと思います。

それでは、先生方どうぞよろしく願いいたします。

新沼：それでは、ここで一の部に入りたいと思いますが、先ほど長澤学部長からもお話がありました通り、「大津波を生き抜いた子ども達の奇跡ではない釜石の軌跡」という演題で加藤孔子校長先生からご講評いただきます。よろしくどうぞ。

加藤：皆様、こんにちは。只今、御紹介いただきました、現在、滝沢東小学校におります、加藤孔子と申します。紹介の中にありましたように、東日本大震災で津波被害を受けた釜石市、釜石小学校に昨年の3月31日まで4年間勤務をしておりました。震災以来、県内の皆様方にはたくさんの御支援や励ましをいただいたことに感謝を申し上げたいと思います。

本当にありがとうございました。今日は、テーマがこれからの岩手の防災教育ということなのですが、私は防災教育の専門家でもありませんので、ただ、その3月11日を経験したひとりの教育者として当時の釜石小学校の様子や、それまでの取組、そして震災を通して私に見えたもの、考えたことを皆さんにお伝えできればいいなと思っておりますのでどうぞよろしくお願いいたします。

今日は学生さんもうらっしゃるので、まず、みなさん御存じのことと思いますけれども釜石市についてお話をしたいと思えます。まず、釜石市の場所、沿岸南部に位置しております。それから安政4年に大島高任が日本で初めて洋式高炉を建設して鉄づくりに成功した場所です。それからその後、新日鉄釜石が釜石の経済を支えてきた場所です。また、三陸海岸の豊かな漁場が釜石の経済の発展を支えてきました。さらに、新日鉄釜石ラグビー、今は釜石シーウェイブスなのですけれども、ラグビーも街の活気を作ってきたところなんです。人口も9万人だった時もあったそうなんですけれども、高炉の転地から現在の人口はどんどん減って、震災後、さらに減り4万人を切っている、少し寂しい街になっています。釜石小学校ですが、学校の場所は海から約1.3km、それから海拔は15mの高台にありました。学区は釜石の中心部と言っていいと思うのですが、市役所があったり、商店街、まあ盛岡と比べるとさみしい商店街ですけれども、そういう中心地に位置しておりました。釜石港も近くにあります。

釜石は大津波により、本当に甚大な被害をこうむりました。亡くなった方、いまだに行方不明の方が千人を超えている状況です。画面は震災直後の釜石地区の状況です。建物の壁や窓を波が突き破っていきました。このように、小さい船も貨物船のような大きな船も波と一緒に街中を流れました。ここは釜石東中学校です。これもテレビで話題になってい

る学校なのですが、このように水没した状態になっておりました。自衛隊さんは被災直後から釜石に入られて身元不明者の捜索から炊き出しからいろいろなことをしてくれました。本当に自衛隊さんに助けられたな、という風に思っています。ここは隣町の大槌町のスーパーの駐車場です。こんなに広い駐車場ががれきや車でいっぱいになっていました。

本当に悪夢と言ってもいいような、平成23年3月11日、金曜日でした。午後2時46分、みなさんもそうだったと思うのですが、今までに経験したことのない大きな揺れ、そしてなかなかおさまらない長い揺れでした。ごごごごごと下から突き上げるような地鳴りのような音もしました。この日は釜石小学校は年度末のため、子どもたちは午後1時の下校でしたので学校に残っていたのは6年生が10人ほど残っていただけでした。揺れている間に電気が消えました。いつもと違う揺れに私でさえ、今日は津波が来るかと予感しました。これは校長室の窓から見える風景です。新日鉄の日本スチールの工場ですが、その長い揺れが終わった後、不気味な静寂の中にこの工場の方からごごごごごとという音が聞こえたように思いました。いつもはそんな音はまったくしない静かな工場なのですけれども、後から、それは津波の来る音だったんだよと地域の方が話していました。防災無線のサイレンが鳴り始めました。「岩手県沿岸に大津波警報発令、海岸付近の方は火の始末をして近くの高台か避難場所に避難してください。」この放送が何回も繰り返されます。私はすぐ先生方に避難所の準備をしましょうと言いました。釜石小学校は避難場所に指定されていますので。ものすごく寒かったので、先生方にジャンパーを切るように、それから名札もしっかり付けてくださいと話しました。職員が動き始めました。表示を書く先生、多目的ホールにマットを運ぶ先生、ストーブを運ぶ先生。副校長先生を中心とする男の先

生方は、校舎内外の点検に走りました。それぞれ動きがとても機敏でした。これが当時の釜石小学校職員の力だと私は思っています。「チーム釜小」と読んでいましたが、当時のチーム釜小の職員を、私は今も誇りに思っています。

サイレンが鳴り響く中、私は校門の方に走って行きました。校庭には地割れが何本も走っていました。そこに、市役所の公民館長さん、町内会長さんが来ました。午後3時前のこの時点で、学校と市役所と町内会の三者がそろったこととなります。地域の方が続々と学校の坂を上がってきます。教室がどんどん満室になります。足の不自由な人や、車で運ばれてきた寝たきりのご老人には保健室のベッドを貸しました。次々に教室の机を出して、非常口を開ける。職員みんなで次々と対応しました。そして、約30分後、私は午後3時21分と記憶しているのですが、その大津波により、一瞬にして子どもたちの家が根こそぎ無くなりました。子どもたちが毎日通った道も、友達と遊んだ公園も、波は全てをのみ込んでしまいました。釜石小学校の8割くらいの子どもの家は被災しました。ランドセルも服も思い出の写真も、全て流されてしまったのです。しかも、一瞬のうちにです。「ママ、これからどうやって生きていくの。」目の前で自分の家が流れていくのを見た当時幼稚園の年長児の男の子が、被災直後にお母さんにこう言いました。これが、学校から見た津波の様子です。釜石小学校は高台にあるので、津波が来るのがはっきり見えました。車がこんなにも簡単にぶかぶか浮くとは思ってもみませんでした。そして、ががつとぶつかり合う音がしました。学校の近くはこのように1階部分までの浸水でした。学区の中でも、子どもたちの家が多くあるもっと海に近いところでは、2階3階まで波が来て、根こそぎ持っていかれました。新しい家が、なぜか土台から切り取られたように、船のよう

に流れていくという状況でした。画面のこの運転手さんは、後でこのように映して皆さんに見せていかと了解をとったのですが、内陸の方で、仕事で運搬をしていて学校の近くを走っていたところに津波が来た。とっさの判断でこのようにトラックの上に乗る、この屋根の上に飛び乗ります。助かりました。

では、下校後の子どもたちは一体どこにどうしていたのでしょうか。子ども達のことを心配でしたが、大津波警報が出ているうちは外にはいけません。もちろん、街中の水も引いていません。その日は夜中まで、泥だらけで寒いですと言って水の引いた町中から来る人たちの対応に追われていました。教室を空ける、ござやマットを敷く、備蓄毛布は100枚でした。最大で700人もの避難者がおりましたので、毛布はどれも足りませんでした。3月だということにこのほか寒い日でしたので、学校中の暗幕やタオルや段ボールなど手当たり次第かき集めました。それもどこにも足りませんでした。

午後4時、学校と市役所と町内会の三者の代表者で対策本部を設置しました。暗くなる前にしなければいけないことを確認しました。一番は電気です。発電機がありましたので、男の先生を中心として各部屋に少なくとも一つは明かりをつけようと、そういうことを確認しました。また、女性の職員は学校中の鍋やかん、バケツをかき集めてきて飲み水とトイレの水を確保しました。町内会は学校の近所の被害にあわなかった家を回り、電気を使わなくてもいいストーブを借りに行きました。もうすでに薄暗くなっていて時間がありませんでしたから、みんな必死でした。夜に私たち学校職員は避難者の名簿を作りました。A4の紙を短冊に切ってマジックで、職員が2、3人ひと組になって各教室を回り、避難者の名前と地区を書いてもらう、書いてあげたりもしました。それを薄暗い職員室に持って行って地区ごとに分けて大きな紙に貼

り、1階の玄関の近くに貼りだしました。それは、翌日からの身元不明者の捜索に大変役立ちましたし、マスコミがそれをカメラで写真にとり、ラジオで「釜石小学校に避難している人の名前を言います。」と流したり、あるいは新聞に名前を出してくれたりもしました。夜が更けるにつれて、さらに泥だらけで避難してくる人がたくさんいました。夜中の10時ころだったと思います。泥に濡れた5人ぐらいの人が来ました。「寒いです。ともかく寒いです、助けてください。」と言うんです。聞いてみると、その中のご婦人がこう話しました。その日はお姑さんと一緒に近くの病院に診察に行った。帰りに、バス停に向かって歩いている途中で大きな地震にあったので、お姑さんに「釜石小学校に避難しよう」と言ったそうですが、「いや、もうすぐバスが来るから、そのバスに乗ってこの橋を越えれば海から離れるから、バスに乗った方が早い」ということで、バス停に向かいました。バスはすぐ来て、2人でバスに乗りましたが、乗った途端に運転手さんのフロントガラスのところから黒い波が見えて、それがフロントガラスを突き破ってあつという間に水がこの目の高さまで来たそうです。「目の前で姑が亡くなりました。それでも、あれから5時間くらい私たちはバスの中でみんなで励まし合って頑張ってきました。今、バスに姑を置いてきてしまったけれど、寒いです。助けてください。」もうタオルも何もなく、ストーブの前に連れていくのがやっとでした。使っていなかった雑巾があったので、それを背中に入れてくださいということで背中に入れてあげました。その夜は、避難所に食べ物は何もありませんでした。私たちも、避難していた人たちも夕飯も何も食べませんでした。食べ物がなかったんです。結局、3月12日の昼にバナナが一本ずつみんなに配られたのが私たちにして見れば、11日の給食を食べて以来初めて口にしたものでした。ですが、避難してい

た子どもたちは誰もおなかがすいたと騒ぎませんでしたし、私自身もおなかがすいたということを考える暇もなく、感じることはなかったんです。

さて、地震発生当時、釜石小学校の子どもたちはどこにいたか。下校後、家にいた子どもが青丸です。丸の数はおおよそです。184全部できないので。山側の家もありますし、海沿いの家もあります。また、下校中に歩いていた子どもたちがいました。この茶色の丸です。それから、いったん家に帰って公園とかに遊びに行った子が、ピンクの丸です。そして、なんと海岸で魚釣りをしている子がいました。この赤丸です。このように、釜石小学校の児童184名はみんながばらばらのところにいたことになります。もしかしたらと、いやな予感が頭をよぎりました。6年生担任が「校長先生、実は今日子どもたちが帰るときに何人かの子どもが魚釣りに行くって言ってたので、行ってたと思います。」また、いやな噂もいっぱい入ってきました。郵便局のあたりで3年ぐらいの女の子、しかも釜小のジャージを着た子がランドセルを背負ったまま4、5人流されたようだったよ、というようないろいろな情報が入ってきました。信じたくありませんでした。でも、信じてしまうような、そんな街中の様子でした。最悪の事態も考えました。その夜、職員室では職員は仮眠の状態です。眠れるはずがありません。学童に1年生の子を預けている先生。どこに行っただろうな、不安そうな表情でした。それから、海岸に自宅がある先生。しかも、ラジオからはその地区の中学生が20名不明と流れてきました。みんなの悲しみと不安が詰まった職員室でした。職員室の扉を誰かが開けるたびにその重たい音が響くだけでした。外は、この校庭では見たこともないくらい、暗黒の町にきらきらと星がきらめいていました。

長くて不安な夜が明けました。これは3月

12日の朝の学校の近くの学校坂の下の様子です。消防車が横転、周りには消防士のヘルメットが散乱していました。先ほどの紹介がありましたように、私は初任が釜石の平田小学校でした。その時の教え子が一人、消防士になっていましたので、このヘルメットがどうかあの子のものでないやうにと、そう祈りました。学校近くの病院の前です。病院の玄関の前に車とがれきが押し流されて行ったやうな跡がありました。道路には、どこの家かわからいよな家が流されていて、半分切り取られたやうに道をふさいでいました。何かの車の上に宅急便が乗っていたり、がれきだらけで歩くところがありませんでした。近くの店の前では、車がこのやうに電柱にはさまれていました。このやうながれきの中、私たち職員は子ども達184名の安否確認に歩くことにしました。長靴をはいて、リュックを背負って、マスクをして歩きました。この地面の黒い、臭いヘドロのやうなおいの街中です。女の足では、とても二次災害が起こりそな街の様子でしたが手分けをして、男の先生や動ける先生が、山道を回って大きな避難所から調べていきました。学校の玄関には児童名簿を貼って、所在を確認できたならその子はここにいたという風に書きましたが、いろいろな情報が流れていたで先生方には、必ず一人ひとりの顔を自分で確認してくること、噂で、「あの子があそこの避難所にいたみたいだよ」とかそういうことでは個々の名簿には書いてはいけな。きちんと会って確かめてくることにしました。街を歩いていると、保護者の方に会いました。会うと、みんな握手をして抱き合っって涙を流しました。「家は？」って聞くと首を振りました。「でもいいんです、校長先生。家族みんなが生きていましたから。」みんなそう口ぐちに言いました。本当にあの時は一生分の涙を流したやうな気がします。3月11日の一日で184人中174名まで確認しました。あと10名というところまで子

ども達を確認しました。そのあとの10人がなかなか見つかりません。やっぱり、郵便局のあたりを通る子どもたちがなかなか見つかりませんでした。

二日目も私たちは歩きました。震災から二日後の3月13日、午後3時2分、釜石小学校184名全員の無事を確認しました。職員室に拍手が起こりました。奇跡だという先生もいました。郵便局のところで流されたという噂があった子ども達。それらしい子ども達が最後まで見つかりませんでした。高台の友達の家にいました。生きていました。海辺で魚釣りをしていた子ども達。走って走って、階段も走って逃げました。生きていました。みんな無事だったんです。奇跡だと思いました。夜の対策本部の会議でも地域の人が拍手をしてくれて、喜んでくれました。暗く沈んだ避難所でしたが、一筋の明るい光が見えたやうな気がしました。では、子どもたちは一体どのやうにして、どこに逃げたのでしょうか。それぞればらばらのところから一番近い避難場所や高台に逃げていました。この黄色い楕円が避難場所に指定されている所です。この海辺で魚釣りをしていた子どもたちは地震直後、逃げることを考えました。ひとりの子どもが、海岸から近い市営ビルに逃げようと言いました。すると、別の子が「いや、今日のやうな揺れはただごとじゃないから、もっと遠くに逃げようよ。」と言ったので、その子どもたちは話しあったそうです。そして、結局その子ども達いわく、「やっぱり頭のいいようすけ君の言う通りにしよう。」ということで、走って走ってこの避難場所に逃げたそうです。結構な距離がありました。

下校後の子ども達全員無事のニュースは釜石の奇跡と言われていますが、先ほどの紹介の中にもあったやうに「奇跡ではありません。」と子ども達は言いました。「僕たちは学校で学んだことを思い出して行動しただけです。」っていうんです。では、釜石小学校で

取り組んできたこと、「奇跡ではない釜石の軌跡」を紹介したいと思います。

一つ目は、「僕・私の津波防災安全マップ作り」です。毎年1学期に低学年は親子で、3年生以上は自分で、家から学校までの通学路で危険な場所や津波避難場所を調べ、地図に書き込みます。これが津波避難場所のマップです。それから、ここは大きな地震が来ると建物の壁が落ちてきて危険だとか、看板が落ちてきそうだというをそれぞれ自分の目を見たことを書きこんでいきます。次に、地区ごとに、下校時に危険な場所や避難場所を調べます。そして、大きなマップに調べたことを話しあいながら付箋紙に書いて貼っていきます。出来上がったマップがこれです。校舎内にはこのマップをところどころに掲示して、常に子ども達の視覚に訴えるようにしました。子ども達の目ってすごいですね。ちょっと掲示してあるものでもすぐに頭に入っています。このマップ作りの方法は、私が釜石小学校に赴任する前の盛岡市北厨川小学校で教頭時代だったんですが、不審者マップ作りをしました。その時の応用です。津波バージョンにしたということです。

二つ目は、「下校時津波避難訓練」です。学校は高台にあるので、学校にいるうちは安心です。子どもたちが登下校時にひとりで歩いている時や、それから遊んでいるうちに津波が来たらどうなるだろうと、それが心配でした。そこで、学校から家に帰る途中で、もしも大きな地震が起きて津波が来たらどう行動するかという訓練を年に1回行ってきました。下校時津波訓練の日は、このように地区ごとに下校します。下校している間に、途中で訓練放送で地震発生のサイレンと放送を鳴らします。これは釜石市の防災課にお願いをして、釜石小学校の学区・地域だけにサイレンと放送を流してもらいました。こういうことをお願いできるのかなと思ったんですが、電話をしてみたら当時の防災課がすぐに「大

事なことだからやりましょう」ということを言ってくれました。それから学内の地域の方、市役所の方、そして町内会、スクールガードのみなさんにも、都合のつく方は参加してくださいという風に声をかけましたし、町内会長さん方にもお願いをしました。町内会長さん方はすぐにやりましょうと言ってくれました。地域の方を巻き込んだ訓練にしようと思いました。地震発生のサイレンが鳴ったら、まず、安全な場所に身を寄せます。ランドセルで頭を守る方法も教えました。次に、津波警報の放送が鳴ったらその場所から一番近い避難場所を考え、急いで避難をします。この訓練を平成20年度から4年間、毎年行ってきました。3月11日、大きな地震の後、子どもたちは学校で行ったこの訓練を思い出したと言いました。川で遊んでいた子は、マニュアル通り、川辺のところで揺れがおさまるまで身を寄せていたそうです。揺れがおさまった後、自分がいるところから一番近い避難場所はどこだったかなということを考えたそうです。結局学校が一番近いということで学校に避難してきました。

三つ目が、「津波防災の授業」です。津波防災の授業では、群馬大学の先生にご指導いただいて、釜石市内の先生方が知恵を出し合って津波防災の教材を作成しました。インド洋津波の映像や、明治・昭和三陸津波の時の浸水区域のことや、それから、これは群馬大学の映像なんですけど、ダミー人形の実験で50cmの波でも人は流されるというようなインパクトの大きい映像を見せながら、各学年の発達段階に合わせて行いました。

震災の二日後に、保護者の方に会いました。「先生、学校の防災教育のおかげです。」と言うんです。どういうことかなと思うと、その家では6年生の男の子と2年生の男の子が二人兄弟で家にいました。揺れがおさまって、少しリュックに何か用意しようと思いながら外に出ようと思ったころにはすでにその子の

うちの周りは膝くらいまでの波が来ていたそうです。弟の方は外に出ようとしましたが、6年生のお兄ちゃんが「いや、待て。学校の授業でこのくらいの波でも人が流されるって聞いたから今、外に出たら危ないから家の中に避難しよう。」といい、その家には屋上があったので家の屋上に避難しました。屋上でも波をかぶりました。それでも、波をかぶったときのつかまり方も学校で教わったような方法でつかまっていれば安全だからと、そこまで考えて、そこまで学校で習ったことを思い出して避難をしていました。隣町に仕事に行っていたお父さんが夜中によく山道を回って戻ってきて、家の中の水をかき分けながら二人を助けに行きました。二人は、お父さんが迎えに来るまで寒い屋上でシートをかぶって待っていたということでした。また、地震直後、なかなか逃げようとしなかったお年寄りを津波が来るからと言っておじいちゃんおばあちゃんの手を引っ張って避難した子もいました。津波防災の授業を子どもたちが覚えていてくれたんです。ただ、私はこの防災教育だけで子どもたちがその場で判断し、行動に移せたとは思っていません。先ほどお話しした、釜石小学校の先生のお子さんで学童に言っていた1年生の子どもなんですが、地震直後、学童の先生たちと一緒に指定の避難場所に逃げましたが、そこまで波が追ってきました。想定外です。ですから、また、もっと高いところに逃げました。結局、指定されていない簡易裁判所というところに逃げることになりました。私たちは大きな指定避難場所から探していったので、学童の子どもたちがどこに行ったのかわかりませんでした。二日目に、学童の子たちが簡易裁判所にいるらしいよという噂があったので、その男の子のお母さん、先生に行かせました。そこで親子が二日ぶりに会えたわけです。二晩も1年生の子が暗い避難場所で身内がないところでずっと過ごしていたんです。お母さんは泣

きながらその子に「よくひとりで頑張っていていたね」と言いました。ところが、男の子の方はけろっとして「だってお母さん。校長先生が全校朝会で津波てんでんこの話をしたでしょう。生きていれば、ちゃんとひとりでも逃げていれば、お母さんが必ず迎えに来ると思って僕待っていたんだよ」とそういう風に言ったそうなんです。その話を聞いて本当に胸が熱くなったんですけれども、「津波てんでんこ」、これは古くから三陸に伝わる言い伝えです。「津波が来たら、とるものもとりあえず肉親にも構わずに、各自てんでんばらばらにひとりで高台へと逃げよ。自分の命は自分で守れ。」ということを機会あるときに話してきました。こどもは大きな地震が起こったりするとすぐ自分の家に戻りたくなるものですが、「家が海の方にあっては大変危険なので家には戻らず、そこから一番近い避難場所に逃げていること。生きていれば、必ずお父さんお母さんが迎えに行くから。」ということも話をしていました。1年生の子が、私の話をちゃんと覚えていてくれた、それが本当に感動でした。この子どもたちは学校教育の中で話を聞くこと、考えること、行動することをしっかりと身につけていたのだと思うのです。教育は、防災教育とか、普段の国語や算数や話を聞くこととか、いろいろなこと一つ一つが点として存在するのではなく、それが線でもなく、面でもなく、私は立体・3Dのように絡み合いながら存在するものだと思っています。学校の道徳の時間に命について」学習したら、命を大切にすることを子ども達が心の引き出しにしまします。友達を大切にすることを勉強したらそれを心の引き出しにしまっておきます。それを、引き出しの中で子ども達は大事に大事に育てながら将来、何かの場面に出会ったときに心の引き出しからその価値を引き出して使うのだと私は考え、指導をしてきました。3月11日の2時46分、そして、津波が来るまでの時間に子



ども達はいくつの引き出しから何を引き出して使ったんでしょう。

じつはこの子ども達が守ったのは自分の命だけではありませんでした。6年生の5人くらいの子どもが遊んでいて、大きな地震の後、避難所に向かって走り始めました。ところがその中に、足の不自由な子がいました。当然のことですが、走る速さに差が出てきます。先頭の足の速い子が後ろを振り向いたとき、その足の不自由な子が遅れていることに気がつきました。そこで「僕がおんぶするから背中に乗れよ」と言いました。ところがその足の不自由な子は「いいよ」と断りました。それは、「僕をおんぶすることで僕だけではなくこの友達のことまで巻き添えにしてしまうから、ぼくには構わずみんな行ってくれよ」、そう思ったそうなんです。その足の速い子は「いいから乗れよ」と言ってその子をおぶって、走って避難場所まで行きました。おんぶをして坂まで走っていきました。それから、さっきも話をしたんですけれども、明治や昭和の津波の時も自分の家まで津波が来たことはないから、地震もおさまったし、片付けようと言っておじいさんおばあさんが片づけを始めましたが、その逃げようとしないうおじいちゃんおばあちゃんに「学校で、こういう時には津波が来るって習ったからお願いだからおじいちゃんおばあちゃん逃げよう。」って言うとおじいちゃんおばあちゃんと手をつないで避難した子ども。それから、地震直後、幼稚園生の弟にジャンパーを着せて「さあ行くよ。」と言って手を引いて避難した子ども。様々でした。一つ共通していたことは自分の命、家族の命、友達の命、みんなのかけがえない命を守ろうと頑張ってくれたことです。

さらに、もうひとつあります。絆です。学校と地域と市役所と保護者との絆です。地震直後、地域の方や保護者の方が道路で、要所要所で自分の子どもだけでなく釜石小学校の

子ども達に声をかけてくれました。信号が消えて大渋滞が起きました。渡ろうとしても渡れない子がいましたが、そこであるお母さんが「今ここを渡っておいで。」と道路の向こうから声をかけてくれました。それから、次々に追ってくる波を見て「ほら逃げろ。」と言って子ども達と一緒に逃げてくれたお母さんもいました。2時46分の地震の3時間前には地域と市役所と学校の三者がそろっていて、4時には対策本部を設置することができました。この三者の関わりで、5ヶ月間にも及ぶ避難所生活を円滑に進めることができましたし、学校と避難所が共存という形で運営することができました。このつながりは、震災後にできたものではありません。震災前から三者が様々な会議にそれぞれ出向いて顔を合わせ、話し合い、学校の広報を届け、それを読んでくれ、そういうつながりを深めてきたんです。それが今回のような震災で生かされたのだと思います。

私がかちらに転勤した後、あるお母さんからこんな手紙をいただきました。そのお母さんは、震災の朝から自分の息子がどこに避難しているのか分からず、いろんな避難所を駆け回りました。その時のことでした。「校長先生。校長先生の手、温かかったこと、よく覚えています。3月12日、たかゆきを探して釜石小学校に来ました。たかゆきはどこ、と聞くと校長先生は私の手を握り、ここにはいないの、のぞみ病院に行ってみて。その手は温かかったです。望み病院には、釜石保育園の子ども達と先生がいました。先生、たかゆきはどこ、と聞くと、ここにはいないの、集会所に行ってみて。保育園の先生の手も温かかったです。青葉ビルで友達の両親に会い、たかは裁判所にいたよ、と教えられました。裁判所でたかゆきと会い、お父さんと会い、その手は温かかったです。生きているってことですよ。とても寒い朝でしたが、校長先生の手、温かでした。」こんな手紙をいただ

きました。家族の絆、親子の絆、学校との絆だと思います。釜石小学校は今年度11月に地域による学校支援活動にかかる文部科学大臣賞をいただいたそうです。平成20年度から読み聞かせやドリル学習の丸付けをする赤ペン先生や、家庭科のミシンの授業に対するサポートなど、地域の教育力を活用する教育活動を推進してきました。今回の震災も、その絆が活かされたのだと思っています。

次に、学校再開と避難所との共存についてお話したいと思います。ちなみにこの写真は昨年度の23年度の5年生の宿泊学習の時の写真です。後ろに見えるのが岩手山です。例年は海辺で宿泊学習を行っていましたが、震災後は海辺ではなく、岩手山の青少年交流の家に宿泊し、登山に挑戦をしました。子どもたちの笑顔がとてもいいと思いませんか。でも、この中のほとんどの子ども達が家を流されています。子ども達のこういう笑顔を見るたびに、命があるからこそこうしてみんなが楽しい学校生活を送れるのだと何度も思いました。震災後、釜石の停電は一週間続きました。学校の固定電話が復旧したのは2ヶ月後の5月でした。3月11日、学校からの連絡はこのようなポスターなどの裏紙に書いて、手分けをして10枚くらい同じのを書きましたが、各避難所、市役所などに貼って歩きました。一週間に1回はこのような連絡事項を貼って歩きました。それと一緒に、子ども達の様子を見て、声をかけ、それから保護者の方の様子を見て、声をかけて歩くということを私たちの仕事としておりました。これは、ジャージ姿で行った卒業式です。卒業式のために準備していた服が流されて着るものがありませんでした。卒業式は年度を越してしまいましたが、4月5日に行いました。校舎も校庭も避難している人でいっぱいでしたので、はじめは音楽室で子ども達に卒業証書を渡すだけにしようと考えましたが、町内会長さんや市役所の方が「いや、その日だけ体育館の布団や

毛布を横に片付けさせるから体育館ですてやるっぺ。みんなでお祝いしてあげっぺし。」と言うんです。避難所の体育館で、脇に布団があるところで子の卒業式を行いました。服はジャージや普段着としました。私たち職員もです。ない人がいるからです。ある保護者が、釜石の中でも被災地でない幼稚園の卒園式が、この卒業式より前にありました。「お父さん、何着ていく。」「何って、これしかないからジャージで行くさ。」お父さんは答えました。家族みんなでジャージで幼稚園の卒園式に行ったそうです。すると、周りはみんないつものようなきれいな服を着ていて、しかもお化粧もきれいにしていて、お母さんは涙が出てきたと言いました。これが温度差だと私は思いました。「小学校の卒業式、本当にジャージでいいの。」何度も聞かれました。「いいんです、服が問題ではありませんから。」

被災された方に寄り添うと言うのは、まず服からでした。学校が始まっても避難所でしたので、私たちもできるだけ質素にジャージのようなものを着ていきました。スーツやハイヒールはがれきの街には合いませんでした。4月20日、入学式です。これも普段着にしました。入学式では、地域の方が郷土に伝わる虎舞をしたいと申し出てくれました。虎は千里行って千里戻るといわれていますので、子ども達の先頭を安全に、という気持ちで、しかも演ずる人たちも被災者でした。家を流され、生活を支える船を流され、かろうじて残った虎で演じる姿に心があつくなりましたが、「俺たちの方が子ども達に元気もらったよ」と言ってくれたことも感動でした。

学校を再開できたのは4月19日です。この時点でも体育館、教室、1階から3階まで避難している人がいっぱいでしたが、学校を再開するにはどうしたらいいんでしょうか。避難している方を移動させることは簡単にできます。「学校が始まるので別の避難所に移ってください。」でも、私はそれはできませ

んでした。それはしませんでした。それは、今まで一緒に歩んできた地域の人たちだからです。少しのご飯を分け合って食べた仲間です。おやつがあれば子ども達にとまわしてくれた、子ども達にとってもやさしい地域の方です。そこで、町内会長さんに部屋の整理をしていただきました。詰められる所は詰める。体育館と1階部分は避難所に、2階以上は学校という空間にしました。俺達ここにいていいの、と聞かれました。いつまでここにいられるの、とも聞かれました。仮設住宅ができて皆さんの落ち着き先が決まるまでいてください、と言いました。私は避難所対応してきた中でたくさんの素晴らしい地域の方と出会いました。そういう方たちと子どもたちが学校が始まって、おはようございます、さようなら、と自然に挨拶を交わしたり、一緒に掃除をしたりする、そんな活動をする中で子ども達が人と人のぬくもりを感じ、地域の方とのふれあいを深めることができると考えたからです。そして、そんな地域の方の姿を通して、自分も大きくなったらこういう大人になりたいと思ったり、震災後も非常にたくましく生きる大人の姿を自然と目にしているうちに、きっとこの子ども達もそういう大人の姿を目標として素敵な大人に育っていくと信じているからです。地域の方にとっても、子どもたちの元気が生きる力になってくれると思いました。学校が元気を地域に発信し、地域が元気になっていく。さらには釜石市全体が元気になっていくと考えたんです。

8月10日、最後の方が仮設住宅が決まり、釜石小学校は避難所を閉鎖しました。仮設に移られた地域の方からこんなはがきをいただきました。「先般、大掃除に伺った折に壁の染み、床の傷の一つ一つが大きな思い出になっていることに気付かされました。それほど濃密な時間を過ごした場所でした。午後3時18分、あの時を境にして当たり前が当たり前でなくなる日々が始まりました。ここにはど

れだけいられるんだろう。いつ出ていってほしいといわれるんだろう。そんな思いで、みなが過ごしました。皆さんが落ち着き先を見つけられるまでいて構いません、の校長先生の言葉は温かく、うれしく耳にしました。長かったです。決して便利ではありませんでしたが、それ以上に児童のみなさんが我慢してくれました。歩きなれた廊下を遠回りして歩き、静かな話し声。お手洗いも不便をかけました。これも先生方の御配慮の賜物と感謝申し上げます。うつむいてばかりいる暮らしの中で子ども達の声に救われることもたびたびでした。つらいけれど貴重な体験をされた児童のみなさんは今後の語り部になり、震災の体験者として成長して行ってくれることを願います。学校が、避難所にいたすべての人々が思い出を、生きていく力を再生産する場所として存在したこと、楽しく語り合っています。ありがとうございました。」というはがきをいただきました。これは釜石小学校の校歌です。歌詞は資料の方に載せておりましたが、作詞が井上ひさし、作曲が宇野誠一郎で、ひょっこりひょうたん島コンビです。ちょっと聞いてください。

ふつうの校歌と違います。「何々小学校」という歌詞がありません。それから「太平洋が」とか、そういう歌詞がありません。まるで井上ひさしさんがこの震災を予想していたかのようなそういう歌詞でした。避難していた本校の子どものお母さんがこんなことを言いました。「校長先生。釜石小学校の校歌いいですね。今の私たちの状況にぴったしです。私達、ここを出ていくとき、みんなでこれを歌って出ていきたいんです。」と言ってくれましたので、私は釜石小学校避難所で毎朝この校歌を流しました。閉鎖するまで毎日、この校歌を流しました。ある子どもが、この歌詞の中の「星を目当てに真っ直ぐ生きる」というところが好きだと言いました。「星は震災があっても消えなかった。あの日の夜も

すごくきれいだったんだよ。」と言いました。私と同じ星を見ていたんだな、と思いました。それから、ある子はこの最後の「手と手をつないでしっかり生きる」というところが好きだと言いました。それは、「一生懸命生きる。そのために僕たち頑張ったんだ、助けあったんだ。」と言ってくれました。次の世代を担うのは、今のこの子ども達です。津波から命を守ることを伝えることができるのもこの子どもたちだと思っています。総合で学習した鉄と魚の街、釜石市のよさを伝えることができるのもこの子どもたちだと思っています。行きたくても生きられなかった命がたくさんありました。大きな震災から守り抜いた、このかけがえのない命を故郷釜石のために生かしてほしいなと考えています。

今、岩手では復興教育に取り組んでいます。今の子ども達が10年後、20年後を生きていくわけですから、この震災を乗り越えて、被災地の小学生も被災地でない小学生も、みんなが同じ岩手に生きる人として故郷岩手のよさを学び、その故郷を好きになって将来を担う人に育てていくことが私たちの役目であると私は思っています。そのために私は今、取りたてて派手なことをするかそういうことではなくて学校で話をしっかり聞く子ども、それから挨拶や返事がきちっとできる子ども、学校で学習したことをしっかりと身につけている子ども、そういう学校の当たり前のことを当たり前でできる子どもに育てていくことが復興を支える人になっていくのではないかな、と思っています。

現在の滝沢東小学校では、釜石の人形劇団が来てくれて、泥の中に棒人形が流されて活動できないと思ったお母さんたちでしたが、泥の中から人形を見つけ、洗って、そして演じて歩いている。その日、民話の面白さもなんですが、その生きる姿に東小の子ども達は感動してくれました。また、学習発表会にも放課後子ども教室の子ども達が何名か来てく

れて交流もしましたし、東小学校で集めている募金からプレゼントもしました。さらに、地域のがやがや市で釜石の水産物を売って、これでも釜石の経済をまわすことができたかなと思っています。釜石の子ども達も、滝沢の子ども達も、岩手の子ども達みんな、もしかしたら進学や就職でこの故郷を離れることはあるかもしれませんが、でも、どこにいても子どもたちの故郷はここ、岩手にあります。子ども達にいい故郷を残してあげられるように、今の私達大人が頑張っていかなければならないんだな、と思っています。

冒頭で話をしました、消防のヘルメットの消防士。教え子の消防士なんです、私が校長として28年ぶりに釜石に戻ったとき、「先生、僕覚えてますか？」といてくれた子どもです。立派な大人になって、よきお父さんになって責任感のある消防士になっていました。学校近くの消防署から出動した消防士さん達は学校の近くの商店街を通っているときに津波が来たそうです。あの大きな消防自動車が浮きました。波に浮かびました。その商店街のアーケードと消防自動車が同じ高さになったとき、消防士さん達はアーケードに飛び移りました。生きていました。教え子たちがこうして生き生きとしっかり働いている姿を見ることが、私たち教師にとって本当に何よりもうれしいことです。震災で一番悲しかったことは、親御さんを無くした子がいたということでした。なんて言葉を書けたらいいか、涙しか出てきませんでした。でも、今の子ども達は心の中はどんなに悲しくてもみんなと同じように笑顔で頑張ってくれています。震災から守り抜いた命を大切に、そして、日々の当たり前を当たり前でできる子どもを学校で、家庭で、地域で育てていきたいと思っています。私は今、「奇跡ではない釜石の軌跡」ではなく、今度は今の学校で「奇跡ではない滝沢東の軌跡」を描きたいと思っています。それは、防災教育や津波のことではなくても、

学校教育の全てが子ども達をはぐくむ、その軌跡を描きたいと思っています。

おまけになりますが、実は釜石と新日鉄つながりの北九州市はたくさんのご支援があって交流がありました。それで、北九州市の文学館のほうから詩の募集の要項をいただいて、応募してみませんかと言われ、大変程度が高い作品だったので岩手からではちょっと無理かなとか思いながら東小学校で応募したところ、なんと最高賞をいただきました。これが「奇跡ではない滝沢東の軌跡」のはじめの一步だと私は思っています。皆さんと共に子ども達を育てていきたいと思っています。ご清聴ありがとうございました。

新沼：約60分にわたりまして当時の大変な状況が目に見えような、臨場感のあるお話を頂戴いたしました。ここで、皆様から、加藤校長先生のお話をお聞きになっての質問・感想、あるいは今日のテーマは「岩手のこれからの防災教育について」ということをごさいたけれども、それについて何か御意見等ございましたらお聞かせいただければと思います。15分くらいでお願いします。よろしくどうぞお願いします。

高橋：花巻八重畑小学校校長の高橋と申します。平田小学校で孔子さんと一緒だったので、若干補足説明させていただきます。話しにありました通り、新日鉄が釜石にありまして、東大出の現場監督みたいな人たちがごろごろいるところです。つまり、非常に学力の高い方がいるということです。平田小学校は浜の学校で、漁師ですからそんなに勉強しなくてもいいという。それではどうしてそんなところで道德教育を始めたのか。学力を急に伸ばそうと思ってもなかなか伸びないので、全校音楽と道德をみんなで一生懸命力を入れて子どもを伸ばそうということでした。私は2校目でしたが、孔子さんと同じ時期に入ってきました。

した。お互いにちょっと若くなくなりましたが今の孔子さんの話にあった通り、若いころと全然変わっていません。はっきりとした言葉で、駄目なものは駄目、そして授業では今のお話に合った通り、必ず分かってもらいたいという願いを込めていろいろな指導をしていました。お互いに芸達者なもんですから、学習発表会では張り合いましたが、男の私にはなかなか評価してくれないんですが、かわいい孔子さんには高い評価がいったよね。浜の文化なので、孔子さんのようにはっきり言わないと親御さんに伝わりません。子ども以上にお父さん、お母さんの気持ちをつかむためには、「自分の考えはこうです。こういうことをやるのです。」と言わないと伝わらない。今のようなお話をしないとなかなか伝わらないということです。孔子さんらしい言葉として「心の引き出し」「絡み合いながら」、このあたりを私も大事にしていきたいと思います。今日は良かったね。

加藤：ありがとうございます。

新沼：高橋先生、ありがとうございました。この中にはですね、これから教員を目指している岩手大学の学生さんもいるかと思いますが、今の加藤先生のお話をお聞きしてどういう感想を持ったかということをお聞きしたいと思います。どなたかございませんか。

久慈：ないようならば、いいですか。

新沼：どうぞ。よろしく申し上げます。

久慈：今日はとてもいいお話、と言うよりも身にしみるような、心に残るようなお話をいただきましてありがとうございました。私は岩手県教育研究ネットワークの理事をさせていただいております、久慈為久子と申します。そしてなおかつNPOポランの広場、そしてそ

の前の段階では、岩手県に不登校を考える父母会を立ち上げたメンバーとしていろんなところを回って歩きました。孔子先生の資料を見て思いましたけれども、只今の件は小学生の場合ですよね。中学生で不登校で学校に行けなかった子供に対してものすごく罵倒があったという話が私の耳にも届いております。そしてまた私自身がものすごく悲しい思いをしておりますが、大槌の不登校を考える父母会の会長さんの御一家が亡くなっております。そういう方々と、山田のほうでもいろんな方々と連絡を取り合いながらと思いましたが、けれども全然電話もつながりません。もうはらはらどきどきで心配をしておりました。でも、みなさん岩手大学を卒業した私に関わってください先生方が教えてくれたんです。先生、久慈さんはどういう方でしょうか。私のところの生徒でしょうか。いろんな情報をもたらしてくださいまして、こちらの理事会にお話は届いております。ただ、私が述べたいのは、先生は東小学校の先生でいらっしゃる。私も十数年前村民でありました。それでそのとき子ども達が東小学校にお世話になったんです。初回から大変でした。作り上げてくことの重さ。私は副会長をさせていただきました。それで村長の柳村さんに会長をしていただきました。制服やジャージなどのいろんな構造に新たに作っていく。そういう段階で、釜石小学校のみなさんの学校の歌を聴いて、東小学校も先進なものを取り上げたようなものですが、でもいまだ不登校の子どももあります。今、私のところに大学を中退した子がSOSを発しています。リストカットでもう日に何度もきっています。ですからこの感謝を述べたら失礼させていただきますが、どうぞ東小学校もとてもいい子ども達と先生方だと思います。父兄もいい方だと思います。民生委員や主任児童委員を私もやらせていただいております。私には加藤孔子さんがとても身近に感じて、今お会いしたとい

う感じがしません。本当に今日はありがとうございました。

新沼：ありがとうございました。それでは先ほどお話をしましたが、学生さんのみなさんの感想でも結構ですし、現場の先生方もいらっしゃると思うのでこれからの岩手の防災教育の在り方、特に留意したい点等もいろいろお考えがあると思いますが、そういうことについてちょっとお話をいただければと思っております。あと一つか二つくらいにしたいと思います。お願いします。

澤田：こんにちは。岩手大学教育学部生涯教育課程2年の澤田と申します。今日は貴重な発表ありがとうございました。私自身、実家が釜石市で小学校が釜石市立白山小学校の、中学校が大平中学校で、高校が釜石高校を卒業してここに来たんですけれども、釜石市の実家で父が今消防士をやっております、母が介護福祉士として働いています。やっぱり盛岡に来て思うのは、こういう言い方すると申し訳ないかもしれないのですが、沿岸地域ならではの教育が行きとどいてないというか、釜石だからできる発表とか被災地の方だからこその発表だな、と今日は再確認しました。これから、岩手だけじゃなくて、全国で防災についての教育がどんどん広がっていけばいいなと改めて思いました。今日はどうもありがとうございました。

新沼：加藤先生、今お話しいただいて何かございましたらお願いします。

加藤：私は2月から滝沢に来ているのですけれどもどうしてこのような機会に話しを受けさせていただいているのかと言うと、やっぱり伝えることが今の私の役割なんだなということ思いながらいろいろな所に出かけて話を少しでも多くの震災当時のこととか、それ

から取組を分かってもらいたいな、という思いで広めています。釜石出身ということで、ぜひ釜石のよさを広めて、さらに大学生になってさらに深めて、故郷を盛り上げてくれるといいなって思います。頑張ってください。ありがとうございました。

新沼：あともう一つくらい、お願いします。

高橋：花巻の西南中学校の高橋と申します。実は私も震災の前の年まで釜石におりました。釜石小学校に勤めておりました、住まいは大渡町二瓶商店の四つ角におりました。復興教育を進めていくにあたって、加藤校長先生のような貴重な体験をお持ちになった内陸出身の先生ってというのがいらっしゃいます。我々、人事異動がありますから、これから続々と内陸出身の先生方が引き揚げてきます。また、津波を知らない先生方が沿岸に勤めるようになるでしょう。その時に、この体験を内陸に持って帰ってくる先生方のネットワークをもとにこれからの復興教育というものを有機的に進めなければならないだろうなと思いました。そして、私がかねてから思っているのは、沿岸と内陸の温度差。これは絶対ある前提で進めていかなければならないと思います。それから、今度は年月が経っていくに従ってこの温度差は広がっていくのかな、といった予測のもとで、一つの提言としてネットワークというものが需要ではないでしょうか。それから、防災教育に関してでありますけれども避難訓練ですね。沿岸地区では下校時の津波想定での避難訓練が行われていました。これが各学校で言うと、年間行事の中で2回ないしは3回、しかも、何月何日、何時何分、教室にいる時間といった場面で想定されています。それはもう意味がないだろうなと思います。いつ地震が来るかわかりませんので。実は先日、筑波のほうに行って来いということで、防災教育の研修を一週間やって

きました。その高島第一小学校と言うところがですね、緊急地震速報を鳴らして抜き打ちの避難訓練を実施している。これは効果あります。やっぱりそういった避難訓練の在り方、沿岸地であれば津波を想定するわけでありすけれども内陸は内陸で抜き打ちの避難訓練ってというのが必要ではないかな、というところではありますが、滝沢東小学校のほうで何か実践の方があれば、あるいはこれからも見通しなどあればお聞かせ願えればと思います。

加藤：避難訓練のことにつきましては、私が滝沢東に来てすぐに感心したのは、レベル2の下校時訓練を行っていたことです。滝沢は岩手山の噴火があったり、大雨とか災害っていろいろんなことが考えられるので、そういうことを想定して、例えば大雨の想定とかっていうことで下校訓練を行いました。今の学校ですごいと思うのは地域の方のネットワークです。スクールガードさんだけでなく消防署であったり警察署であったり、役場の防災課の人と学校とがいっしょになったセーフティネットワークという組織があって、それで子ども達を守っていくということをやっているのが東小学校です。釜石小学校でも実は、震災前には先ほどお話したような下校時津波避難訓練を防災課が流してくれてやっていた。震災後のはじめの1年は子ども達の心のケアのために避難訓練はしない、という日が続いていました。しかし果たしてそれでいいのか、と私は思い始め、というのは例えば、新しい1年生が入ってきて学校での火災訓練もしないでいて、それいいんだろうか。いや、そうじゃないよな、と思い始めて火災の訓練も行いました。それは手立てが必要です。みんなの命を守るためにサイレンを鳴らすのだから、決して怖いものでもなんでもないからね、と子ども達に言いながらやっていたり、それから、震災後の防災のサイ

レンを鳴らすことはやっぱり市民の心のケアによくないということで防災課からは流してもらえませんでした。では、訓練をしないのか。そういうわけではなくて、だったら先生方がそれぞれに分かれてカセットテープを持って歩きなさい、ということで、テープを持って歩いたというようないろんなパターンを考えて訓練はできると思っていますので、私はいろんなパターンを考えて訓練をしていきたいなと思っています。

新沼：ありがとうございます。先ほどの加藤校長先生のお話の中にはこれからの岩手の防災教育について、子ども達の命を守っていくためのいろんなヒントがあったと思います。今お話があった下校時の避難訓練とか、あるいは子ども達一人ひとりのマイマップ作りとかですね、そういったこと、いろいろ参考になる点が多いと思います。今日は一生に一回聴けるかどうかという非常に貴重なご講演をいただきました。皆さんで拍手で感謝を申し上げます。ありがとうございます。では、ここで10分ほど休憩を取りたいと思いますが、あの時計で14時55分までにしたいと思います。よろしくどうぞ。

## 平成24年度 教員研修会 (2)

### 「想定外の自然現象への理解と備え」

土井 宣夫 先生

土井：今からお話するのは、ある意味大人の判断力はいかに悪いのかということについてお話しする場面もあるかと思っています。そんなところで聴いていただければと思いますが、今日はあえてテーマを、こういう形なんですけども、題材として火山を選んでみました。3つの火山の事例から想定外の自然現象を考えてみたいと思います。その背景にあるのは言うまでもありません、3.11をどういう風に理解

して行ったらいいのか、ああいう現象をどういう風に考えて備えていったらいいのか、という問題意識です。扱う火山の噴火は3つでございまして、1980年のアメリカのセントヘレンズ火山の噴火、二つ目が91年の雲仙・普賢岳の噴火、そして2000年の三宅島噴火。この3つの噴火を題材にしたいと思います。この3つの噴火は、ある意味想定外の噴火が起こったんです。火山活動という意味で、ちょっと岩手ですとなじみのない自然現象ではありますが、実際に起こった現象を見ると、人智の及ばないことがどれほどあるのかということなんです。3.11も同じでした。そのような観点でお話をさせていただければと思っております。

まずお話したいのがアメリカのセントヘレンズ火山です。場所は西海岸寄りにありまして、シアトルの近くなんですけれども3000mを切っていますけれどもきれいな火山です。氷河が少しあります。そして、周りは針葉樹林帯で林業の盛んな地域であります。山がどこほこしてありますが、ちょっと粘りっけの多いマグマを噴き出して火山を作り上げていたタイプのものでした。この火山が大噴火いたしました。1980年です。その結果どうなったかと言うと、この写真のようになりました。ほぼ先ほどと同じようなアングルから撮っているんですけども、山頂が無くなってしまふ、そのような大規模な噴火であったわけです。手前に向かって大きく口を開けたような形になっております。噴火の前と噴火の後を比較してみますと、この矢印の場所が同じ場所を指します。黄緑も同じなんですけど、そうしてみますと噴火前、噴火後なんですけど、この部分がすっかり形が変わっている。事実上、山が無くなっている状態です。無くなったのはこの部分です。どういう噴火かと言いますと、山体崩壊という、後でわかったことなんですけれども、火山ではしばしば起こるタイプの大噴火でありました。私の調査では



7回、こういったタイプの噴火が起こっているわけですが、珍しくない現象だというわけなんです。では、どういう風にこの噴火が起こったか、まず見ていただきます。この山はだいぶ長く活動を休止しておりまして、あまり活動的でない火山と思われていたんですが、過去の火山灰を調べると結構噴火しているんだということが後でわかるような活動を繰り返していたわけです。そして、1980年5月の大崩壊の前、地震が起こり始めまして、火山性の地震なんですけれども、山帯が隆起し始めました。その場所と言いますのがこの部分でして、山帯の北側の部分がぐんぐん隆起してきたんです。膨らんできたんです。なぜかと言いますと、山帯の内部に粘りっこいマグマが還流して、山をぐんぐん押し上げ始めていたわけです。その部分が膨らんできて、ひび割れができました。氷河なども割れて崩れ落ちたりしたわけです。噴火直前には1日当たり1mのスピードで膨らんできていたわけです。これは何か起こるかと、そういう状態であったわけです。そして、こうなるんです。これが噴火の日、18日です。崩れ落ちる直前なんですけど、ここでひび割れが発生していった中でそのすぐ下の山帯付近でマグニチュード4.5の直下型地震が発生します。この揺れをきっかけとして山が崩れ始めたんです。1回、崩れる様子を何枚かの写真で見させていただきますけれども、こんな風に崩れます。快晴でして雲ひとつない状態。皆さんが、多くの人が見ている中で朝方8時17分に崩壊が始まります。最初の崩壊、8時32分ですがこういう状態になりまして、こういう形です。これ32秒後の写真です。一つの山が無くなるのは1分かからない状態で山が崩れ落ちて大噴火に至ったということなんです。ちょっと戻ってみますが、これが17秒前、13秒、10秒、6秒、2秒、1秒、ということです。こういう風に山が崩れていったわけです。これで見ますと2秒後には山頂部から山帯部にマグマ

が入っていましたので、圧力が解放されたことで、真上から噴煙を吹き始めます。そしてここです。見ていただきたいんですが、もっとう噴煙が盛り上がってまいります。ただ注意していただきたいのが、これは色が白いです。上に上がったのは黒い。上はマグマが噴火して、こちらは山帯の中にあった水蒸気が噴き出してきているということで、白色をしています。次々こういう形で噴煙が広がってこうなったわけです。こちらに白い噴煙、こちらに真っ黒い噴煙が吹きあがっていったわけです。このあたりに、よく見ていただきますと、水蒸気の糸を引いて噴石が横に向かって飛んでいきます。つまり、下から出た噴煙は斜め上方に向かって吹きあがっていったわけです。これは爆風に近いものでしてブラストと呼んでおりますけれども、これによって30km以上にわたる広い範囲が被災したわけです。人も亡くなりました。川に沿って山を作っていた土砂が流れ下ります。その中にもマグマが入っておりましたので、それが爆発しながら、噴煙を上げながら流れていたということです。後ろには黒い噴煙が上がっていく様子が見えるかと思えます。こういった、山が崩れて土砂が流れ下る現象、これを岩屑雪崩ないしは岩なだれと呼んでおりますけれども、その大規模なものが発生したということになります。岩手山もこのタイプの噴火を繰り返しているわけです。そして、横に噴き出した爆風。これが非常に強烈だったわけです。これは山の向かいの川をはさんだ丘の上と言いますか、山の様子なんですけれどもたくさんの木が倒れています。まるでマッチ棒のように見えていますけれども、実はこのマッチ棒、直径が1m以上です。それがすべて吹き倒されて、爆風が流れた方向に並んでいるという様子です。これが引きちぎられた木です。この直径が1m以上あります。左から右に爆風が入って、ちぎられているわけです。木の皮は全部むかれて、木の幹には石

が突き刺さっているという状況なわけです。マッチ棒1本が巨大な針葉樹林ということになります。ここで話したいのは実はこの写真なんです。こういう巨大な噴火が起りまして、晴れた日に起こったものですから、セントヘレンズが崩壊したというニュースは世界中を駆け巡りました。日本にも入ってきました。とんでもないことが起こったということで、世界中がびっくりしたわけです。ところがなんです。私たちは後で知ったことになるんですけども、ロシアのカムチャッカ半島にベジミアニという火山があるんです。この火山で1956年にそっくりな噴火があったんだということが、後で遅れて知られるようになりました。その写真がこちらなんです。これがセントヘレンズなんです。これを比べていただくと、山の山頂部分が無くなっています。こちらと同じです。その無くなったくぼみから個々にマグマが表れています。ここに溶岩ドームを作っていたわけです。ここから水蒸気を上げている。こちらもそうです。こういう風に、形と言ひ大きさと言ひ、溶岩ドームが出来上がる様子と言ひ、ほとんど瓜二つなんです。ところがこのカムチャッカ半島は、人口密度が高くなく、人も少ないわけです。そういう意味でこの噴火は、旧ソ連の方が英語の論文で公表していたんですけども、私もセントヘレンズの噴火の後にそれを取り寄せて読んだのですが、何回読んでも意味のわからない論文でして何が起こったんだろうというくらいの感じの論文だったんです。ただし写真はすさまじい写真がありまして、こういう写真が入ってまして、同じだなと思ったんですけどもそういうくらいの認知度しかない噴火だったんですが、そっくりなものが既にあってセントヘレンズが起こった。私たちはセントヘレンズを見ることで、これは想定外の本当に大きな噴火に遭遇したんだなと感じたんですが、いや、そうではない。4年前にはカムチャッカでほとんど同じ

ものが起きていたんだと改めて知ることになりました、びっくりしたわけです。私たちは地球で起っていることを知らなかったということです。

次の事例が雲仙・普賢岳の事例です。これは九州の火山ですが、標高1500mです。これは噴火の後、北側からみた写真ですけども、こんな山でして、ここに溶岩ドームがのっかって、まだ熱いので水蒸気をあげている。そんな火山の状況なんですけれども、この火山が1990年から活動を始めます。どんな活動であったかと言うと、雲仙・普賢岳は島原半島の島原町にある西側の火山になります。さらに西側には橘湾というのがございまして、そこが火山活動の根っこの部分です。90年の12月17日に最初の水蒸気爆発が起こります。この活動の範囲に、橘湾の方から火山性の地震が発生しまして次第に浅くなって東に移動してきました。雲仙・普賢岳の山頂を目指して地震が移動して行ったんです。これはマグマが山頂を目指していたということなんです。そしてついに、90年の11月に最初に噴火いたしました。このとき、地元の方はなんとやったかと言うと、やっとこれで観光客が集まる、と言ったそうなんです。どういうことかと言うと、ごく小さな噴火で山頂の上付近だけが危険な状態だったんです。それで、当時の雲仙・普賢岳は観光客が減っておりまして、何か目玉がほしいという雰囲気がありました。そういう中で噴火しましたので、これはちょうどいいと考えた。そのくらいのんびりした噴火でした。ところが翌年91年2月12日なんですけども、噴火が再開します。その時の噴火の様子ですが、11月の噴火の時と様子がガラッと変わってきました。異様に激しい水蒸気爆発を繰り返すようになりまして、ここは普賢神社、山頂部にある神社なんですけれども、ここが灰に覆われるようになってきました。さらに火山は繰り返し噴煙を上げる状態になったんです。このときに

火山灰を調べたんです。そうしましたら、12月にはなかったマグマの小さな破片がマグマの中に含まれるということが分かってきたんです。つまり、マグマが火口の下、相当浅いところまで近づいてきているという証拠が得られるようになったんです。したがって、噴火が活発である、爆発的であるという状況になってきました。そして5月18日、山頂なんですけど、水蒸気爆発を繰り返している場所がぐんぐん持ち上がってきました。それで火口がこのように崩れるようになりました。地獄後火口と呼んでいますけど、ここを中心に山が膨らんでいく状態になりました。そして5月20日ですけども、ついにマグマが姿を現してきました。これが元凶だったんですね。それで、頭の上にとんがり帽子のような土砂を載せていますけれども、溶岩がついに地表に到達したという状況になりました。この溶岩がどんどん上昇してくるわけですから、翌日にはドームがまるで桃を割るような形に4つにぱこっと割れたわけです。このときまでは大きな噴火はありませんので、大変なことが起こったという認識がなかったわけです。そしてどんどん上昇が続きまして、今度はバラを広げたような形に割れながら溶岩が広がっていったわけです。そしてついにこちらの火口の壁を崩すようになりました。右斜面は急斜面です。そしてこちらに島原の街が広がっているのがわかるかと思いますが、そちらの方向に向かって火口を崩し始めたわけです。そんな状態ですので、いずれ溶岩流がこの斜面を流れ落ちていくだろうと想定したわけです。ところが実際はちがいました。何が起きたのかと言いますと、これです。溶岩が形を変えて火砕流になっていきました。山頂がこちらなんですけど、溶岩がここにあふれだしたんですけどこれがガラッと崩れ爆発して、溶岩の破片と細かい火山灰に代わって高速に流れ始めたんですね。これが火砕流です。当時の日本にはこんなにはっきり火砕流が出

たというような時期がありませんでした。過去にはいっぱい起こっていたんですけど、我々が知るようになってからほとんど発生していないようですから社会の中でこの火砕流という認識がほとんどありませんでした。あまり経験したことが無いという現象なんです。ところが、これが非常に危険な現象なんです。なぜかという、こういう風に粉々になって高温のガスと溶岩の破片が一緒になって流れ下ってくるものですから、まず高速であるということです。時速が100kmを超えることがあります。それから温度が高いことがあります。後の測定で600度以上という実測があります。600度から800度くらいだろうと今考えているんですけど、それくらいの温度のものであります。従いまして、これに入ると一瞬で亡くなってしまうという現象になります。そして、だんだんこれが大きくなってきました。これは93年の大きな火砕流ですけども、これを見ていただきますと、ここに小さく点に見えますけれども、これは二階建ての家です。こちらにもちょっと写っていますが、これは人家なんです。それに対して上がる噴煙の大きさがいかなるものかわかると思いますが、この先端部分に溶岩の高温の破片がいっぱいあるわけです。これが砕けてガスを吹き出して上に噴煙を上げている。灰神楽をあげている状態です。これが火砕流ということになります。これで最終的には44名の方が亡くなっています。これも火砕流なんですけれども、この火砕流が人家などを流れていったわけです。そこからどんどん現地調査に入りました。溶岩の破片とそれが砕けた火山灰が一緒になって仲良くなっている、そんな堆積物です。もうひとつ注目したいのが、上半分が赤くなっています。これは火砕流が高温であった証拠でして、高温のものが空気と触れますとこのように赤く酸化するんです。これが堆積物全体に認められるわけです。そして、吹き飛ばされた家です。鉄骨の家です

がこんな状態です。一番近いところの家はこんな状態で。火砕流が当たったところ、2階の屋根が飛ばされたり、家の中が炭化したり、ここに雨どいがありますけれども、この雨どいが高温のためにだらんと垂れさがったり、こういうような状態になります。立ち木は、左手が上流なんですけれども火砕流が吹きつけますと、木の表皮ははがされて、根元に火山灰が当たってえぐられるということです。こっちでは大きいのが倒されていますけれども、このくらい威力があるというわけです。

それで、今日お話ししたいのはこういう現象に遭遇した時、人は何をしたかと、いう点です。なんと、この火砕流に近付いて行ったんです。詳しいお話をしますと、これは初期段階の状態なんですけど、個々に溶岩ドームができて崩れ落ち、火砕流ができる。繰り返しこれが崩れてきたわけです。先ほどもお話ししました通り、当時の人々は火砕流がどんなものかということを理解していませんでした。従いまして、この火砕流についてマスコミ関係者が非常に強い興味を抱きまして、よくある映像・写真、これを撮りたいということで、ここの場所、定点という場所なんですけれどもこれに行って映像を撮っていったわけです。なぜここを選んだかと言うと、火砕流は谷を抜けてこちらへ流れ込もうとしているものですから正面に当たると言うこと。つまり、迫力ある写真を撮れるということですね。加えて、ここに大きな谷がある。こちらはそれよりも随分高いところにあります。仮に火砕流が流れてきても、谷の中に火砕流が入ってここは安全であるという風に考えたわけです。これが大間違いなんですけども、当時はそう考えていました。毎日晴れた日を中心に報道関係者が集まりました。映像にとっています。そして、この人たちが島原市のタクシーとハイヤーを全部借り上げてしましまして、こういう形で自分たちの都合のいいように使っていたわけです。地元の人、タ

クシーの運転手がここに一緒にいたわけです。この人たちが全て亡くなってしまった、ということです。どういうことかと言うと、6月3日になりますけども、大規模な火砕流が発生しました。ここに噴煙が上がっていますが、山からは噴煙が上がっていません。ここから溶岩ドームが崩れまして、火砕流が流れ落ちて、こちらは斜面というか平地なんです。平地の方から噴煙が上がっている、火災が発生してしまったわけです。先ほどの定点と呼んだ場所は煙の中です。これによりまして、43名が亡くなりました。この火砕流は規模が大きかったために、その噴煙が有明海を超えてさらに東の九州東部まで降灰した規模のものでした。その火砕流の様子ですけれども、上から下に火砕流が流れていますが、3.11で見た景色とそっくりです。木が打ち倒されて吹き飛ばされて、ここに家が2件あったんですが、基礎を残して、基本的には何もありません。そして車が燃え上がっています。吹き飛ばされています。そして、遺体はその辺にあるというような状態です。そこで一つ注意していただきたいのは、この道路を見ていただきたいんですが、この道路に積っている火山灰はせいぜい5cmもない、非常に細かい火山灰です。これによってこれほどの破壊が生じると言うことです。高速で流れているので発生した後では逃げられないということ。非常に強い爆風を伴いますのであらゆるものが破壊される。高温です。全部が焼かれるという状態になります。これが火砕流災害です。こういう現象に対して、人は近付いて行ったわけです。さらに繰り返し火砕流が発生して8日にも流れ落ちます。これは火砕流本体で、周辺に火砕流の灰神楽が広がります。これもその様子なんですけれども、周りの家のごくごく薄い火山灰の含まれる爆風によって跡形もなくなっているという状態が分かるかと思います。つまり、ここで言いたいのは、こういう現象が発生した時に、人

はそれに近付いて行った。そして定点というところを作って観測・観察していた。これってなんだろうか、ということなんです。実はこれ、3.11にもあった現象です。つまり、定点って言いますのは考えてみますと私の意見ですが、人の好奇心が生み出しているものだと思います。大人になるとこれに仕事の事情などが加わってきますけれども、基本は好奇心があって仮想的に安全な場所として生み出されるのがたぶん定点だと思います。私は3.11の津波災害の現場を調査していますけれども、先ほど御紹介にあった釜石市の北部に箱崎・白浜という地区があります。それは鶴住居の街から東へつきだす半島の北斜面にある小さな集落で、一番東側の集落です。ここでも、定点が作られていたというのは、住民の生き残った人の話から聞きました。詳しくお話しますとこうです。私が聞いたのは、釜石市内で車に乗ってる時点で地震が来て、これは津波が来るなということで、箱崎・白浜に家があるもんですから、その船、自分が持っている船が危ないということで、早く戻ってどうにかしようということで、箱崎・白浜の方に向かって走ったんだそうです。途中、海岸すれすれの道路を走って、さらに集落に入っていくわけなんですけれども、それを抜けて集落の上に来た時に津波が来たということです。その地区の場所はどのような地形かと言いますと、東に向かって半島が突き出して、北斜面にあるんです。こちらが北だとすると小さな湾がありまして、そこに港があるんです。そこから比較的急な斜面の中に段々畑状に家が建っていて、上の方まで集落になっていて、港を取り巻くような形で家が並んでいます。そして、港のすぐ後ろに高さが5mほどの防潮堤があります。さらにそれよりも高く、海面から約10mのあたりに平らなところがありまして、そこには家が無いんです。それから上には家があるんです。私が聞いた、助かった人の話によりますと、当

日、津波警報も出ていて、そのこの地区の住民がとった行動なんですけれども、なんと海の様子を見ようとして集落から降りてきて、その高台のところに集まっていった。そして、ひとりの男の人はわざわざ防潮堤まで降りて、その上に上って海を見ていたということでした。高台というのは一見非常に安全な場所なんですね、港よりも高いですし、防潮堤よりもさらに上、10mある。そして、海が丸見えなんですね。非常によく見える。木も2本くらいしかなくて、海や港を見るにはいい場所なんです。そこに人が集まったところに大槌の方から黒い、非常に大きな津波が向かってきたということで、一斉に逃げたんだそうです。防潮堤に上っていた人は防潮堤を降りたところで津波に飲まれたそうです。高台に逃げた人は一斉に逃げたそうなんですけど、津波に追いつかれて全て呑み込まれたと、その様子を見ていたということでした。その人の話によると、海岸沿いの道を車で抜けて集落に戻ったんですけれども、もし津波が少しでも早ければ自分も飲まれていたと思う、ちょうど集落の上に来て車から降りようという時に津波が入ってきたので降りなかったのだ、とおっしゃっていました。ただ、集落の人が津波に飲まれる様子を皆見ていたというお話でした。つまり、このときに作られた高台の海を見るところ、これが定点なんですね。雲仙・普賢岳は火砕流を前に、自分たちの想定した安全な場所と思うところを作って、それを定点にしたというわけです。同じことが津波のところにもあるということです。これは大人が作っているんです。この仮想的な安全の場所をつくりだしているということなんです。ではこの定点がなぜ生まれるのかな、ということはずっと考えてきました。この二つに共通するのは、自然現象に対する理解不足だろうなと思います。あるいは誤解です。火砕流は特に誤解がありました。それからきめつけもあるように思います。ここは安全だ

と、現象が届かないという決めつけですね。根拠のない決めつけが行われて設定され、生まれるということです。じゃあなんで定点は安全だと思われるのかを考えてみますと、一見安全な条件があるんです。雲仙・普賢岳の場合は目の前に大きな谷があります。そして、いる場所は高台です。だから安全だろうと一瞬思える。それから、さっきの箱崎・白浜の事例ですと、高台であります。そして海の様子がよく見える。一見安全な場所に思える。そして、人が集まれば集まるほど安全だと思える。みんながいるから安全だと思える、ということだと思えます。そして実際にはそれとは全く違う大きな現象が押し寄せてくる。そして、亡くなる。ということをおとなが作りだしている仮想的な安全地帯だと思えます。結局はこういうことじゃないかと思えます。自分は大丈夫だという考え方です。もし仮に、津波が自分を殺しに来ると思えば、ちょっときつい言い方ですが、そんなところには行かないでしょう。火砕流が自分を殺しに来ると思えば、そんなところには行かないでしょう。でも、行ってるんですね。それって怖いもの見たさだと私は思っているんです。怖いものは自分を殺さないんです。単にこわいんです。ところが、自然現象は殺しに来るということです。この意識が欠けているのではないかということです。これは雲仙・普賢岳の事例から考えていることです。火砕流災害は、火砕流にあつたら、生存率は限りなくゼロです。100%近く亡くなります。そういう意味では、私は講義の中で火砕流災害のことを皆殺し災害と呼んでいます。ところが、誰もこの言葉を使ってくれません。あまりにもどぎついで皆さん使わないのだと思いますが、実はそういう災害なんです。

次は三宅島の事例です。これは2000年に噴火いたしました。島の様子はこんな様子です。太平洋に浮かぶ火山島なんですけど、これから見るとのどかなんですが、海の底も含め

てみると、これは巨大な火山です。火山の山頂火口付近に実は人が住んでいるという状況なんです。本当の怖いところはここです。島なんですけど、火山の山頂付近にいていうことなんです。ですから、いつ何が起こるか分からないという覚悟が必要なのが火山島です。ここで2000年に噴火しました。ここで地質図をあげてみますけれども、山頂火口がここにありまして、周りにたくさん色がつけてあります。これはみんな溶岩流です。溶岩が四方に流れていますが、一つ大切なことがあります。それは何かと言いますと、山頂付近から紫色の溶岩が流れていますよね。これは比較的古い溶岩でして、新しい溶岩はここから噴火して流れているということです。山頂から噴火していないんです。これを山腹噴火と呼んでいますが、この山腹噴火を繰り返してきた火山だということがまずわかります。島の地形を見ていただきますと、斜面が急だと黒ペンで印をつけて、ゆるいところは白っぽく表現する。傾斜の大ききで作った図面で作って見ますと、この三宅島はここが黒っぽく見えます。そのうえに白っぽい部分が見えます。つまり傾斜の緩いところがある。急な斜面を登ると平坦になって、また急になって登りきると平坦になってまた急になる、という繰り返しをしている火山だとわかります。これが一つの火山です。これは海底から出来上がってきている火山つまり3つの火山が上に上にと積みあがっているわけです。そして、この積み上がり方がこの赤い丸で書いていますようにここが平坦だということから考えますと、ここはもともとはくぼ地だと考えられるわけです。この火山が成長することで、だんだん埋ってここは平らになっている、と考えざるを得ないわけです。ここは大きな昔のくぼみ、ここもくぼみ、ということなんです。火口の直径が1kmを超えると火口とは言わないでカルデラと言います。二つのカルデラがあつて大きなくぼみ作つていて、

その中に火山が成長して、くぼみを埋めきってカルデラができて、その中にまたマグマが成長して、くぼみを埋める。この3つが積み重なっているんだということが、この地形からわかります。これが2000年噴火の時も重要な要素となりました。この三宅島の噴火はいずれも山腹噴火です。この青い矢印を書いたものが山腹噴火なんです。15回、山腹噴火を繰り返しています。ときどきちょっと色は変えていますが、山腹噴火に山頂からぽこっと小さい噴火が伴うものを色を変えていますが、基本的には15回山腹噴火なんです。ところが、2000年噴火、一番上ですけれども、これは全く違う噴火だったんです。おそらく、こういう風に考えます。これは西暦1000年です。1000年前から、分かっている限り15回の山腹噴火を繰り返してきた。だから16回目も当然山腹噴火が起こるでしょう。これは常識的な考え方だと思います。ところが2000年は、ちょうど1000年後になりますけれども全く違う噴火をしてしまっているということなんです。じゃあどういふ噴火になるんだということになるわけです。まず、2000年の6月26日です。火山島の下で前兆の火山性地震が起こり始めました。そうしましたら、翌日、いきなり海底で噴火が始まります。西の沖合で海底噴火が起き始めます。火山は海の底からずっとあるわけですから、この海底噴火は山腹噴火と呼んでいいわけです。予想通り、山腹噴火が始まったというわけです。ここまでは予想通りだったんで、実は私も安心したんです。しかし、変なことが起こり始めます。それは何かと言うと、マグマが北西の方向に向かって海底の下をどんどん西に向かって移動を始めたんです。30kmくらい離れたところに複数の火山島があるんですけども、そっちの島に向かって三宅島からマグマが移動を始めたんです。20km以上、島の方に向かって移動したんです。え、と思ったんですが、別に噴火しているわけじゃないのでま

あいいかと思いました。三宅島の火山の下からマグマが無くなったので、これで噴火が無くなったと判断したわけです。ところが本番はそうでなかったようです。これから本番でした。何が起きたかと言いますと、小さな噴火、最初にぽこっとやったんですが、そのあと、山頂が沈み始めたんです。この2つ目のカルデラ、大体1km位あるんですけども、カルデラの中が沈み始めまして上に乗った3つ目の傘が形を残したまま、地中に潜っていったんです。これが日に日に大きくなりました。これは形を残したまま沈んでいった火山です。そして最終的にこうなりました。全部沈んでしまって、1kmを超えるようなカルデラが出現したんです。噴火もしないのに、山が沈んでたんです。このあたりから、今後どうなるのか全然わからない状態になりました。16回目が全く違うパターンで進んだわけです。先ほどの地質図に戻ってみると2つもカルデラがあるというお話をしましたが、この上のカルデラが2000年噴火では再び現れてできあがったんです。そのカルデラを地質調査してみますと、大体2500年前の出来事だということが分かったんです。つまり、2000年噴火というのは、2500年前に起こった噴火がまた発生したということなんです。そしてこの大きなカルデラの中から大噴火が始まります。これは8月に入ってからですが、14km噴煙が上がりました。こういった大爆発を繰り返すうちに、再び火砕流が発生し山を下って行きました。ここにあるのは三宅島唯一の三宅高校です。これは校舎です。この校舎に向かって流れ下ってきたんです。この中には教員がいました。それで、そのうちの一人がビデオを持っておりまして、火砕流が校舎に向かって流れ下ってくる様子を撮影してるんです。その時、音声が入っているんですね。それを三宅島調査に行ったときに見せていただきましたが、こう言っているんです。理科の先生です。雲仙・普賢岳の火砕を知っている

人です。「ああ、こっちに向かってくる。ああ、だめだ。」こういう言葉が残っているんです。この人はこの校舎が火砕に呑み込まれることを覚悟したのだと思います。実際には火砕流はこの縁で止まりました。それで、死者が出ていないんです。この噴火が続きました29日になりますと、火砕流がついに海に到達し始めまして、これは海に入る様子です。海に入りまして海上を走ります。実はこの火砕流の下に人家があって人がいたんです。この人は知らなかったんです。なぜかという、幸いなことに、これは水蒸気の塊ですが、低温だったんです。雲仙・普賢岳は600度以上あったんですが、もっと低温だったために助かりましたが、ギリギリの状態だったようです。その記録を後で読ませてもらったら、こういう記録があります。これは民家だったんですけども、あらゆる隙間から火山灰が吹き込んできてガスが充満して息苦しかったと言っています。ギリギリで助かった人なんですね。そういう状態で噴火は激しくなってきたわけです。カルデラはどんどん大きくなります。さらにこの後、想定外なことが起こり始めます。これは、噴火によって島が荒れた様子です。まだ入山禁止になってますけど、2006年に調査に入ったんですが、その時も入山禁止だったんです。それで、三宅村の村長さん、平野さんっていうんですがちょっと知り合いだったもんですから、村長さんと職員の案内でガスボンベを付けて調査に入らせてもらったときの写真です。想定外のことは何かっていうと、世界で最大規模のガス噴出が始まったんです。山頂の大きな穴から亜硫酸ガスが大量に出まして、これが流れ下ってきたんです。風の強いときには東京の街の中にこのガスが流れたわけです。風向きによってあちこちに流れまして、島はととも住める状態じゃなくなりました。9月には全島民避難という形になりました。これがだいぶおさまってきて帰ったのは2005年になってからでし

た。2000年から2005年は全島民が避難した事態になったわけです。つまり、大規模な山の陥没、そして大噴火と火砕流、そして想定外のガスというのが次々に来まして、噴火が進んでいったという形なんです。これはガスによって廃墟となった住居です。一見、この家は大丈夫そうに見えますが、屋根のトタン等は全部溶けています。そして、雨がそのまま家の中に入ってしまって今は廃墟の状態です。こういう状態になってしまっています。濃度が濃くなると、私達もガスマスクをつけて調査しました。

こういうことで、2000年の三宅島噴火は、遠い過去、2500年前に発生していた現象の再発だったということです。セントヘレンズの火山で見ると、地球上の別の場所で起こっていた現象だったということなんです。そういうものを想定外という形にしていたということになります。想定外の現象を考えてみると、どういうことか、なぜ想定外なのかと言いますと私の意見としてはこうです。私たちが自然を見る目、その時の時間スケールが、あきらかに自然のスケールとはずれてしまっている、ということです。人の時間スケールは多くの場合、人の一生、100年くらいを規準に考えがちです。100年単位で物事を見てしまいますと、自然からみると非常に短い時間であるために、そこで遭遇しない現象がいくらでもあるわけです。大規模なものはよりまれに発生するものでありますから、遭遇しない世代がいっぱいある。それが続くわけです。ところが、自然の方からすると、2000年や3000年間隔で起こることというのは普通なわけです。規模が大きくなればなるほどその間隔は開くわけです。たとえば、1万年に1回、マグニチュード10というようなものが出る可能性があると言われてきましたけれども、そういう巨大なものほど間隔が大きいわけです。だから、私たちの時間スケールは、自然を見る時間スケールとして



ずれてしまっているんだという風に考えないといけないということです。そう考えないと、想定外という言葉の中で全部理解不能な状態、どうでもいいやという状態にしてしまうということなんです。従いまして、大切なことは何かという風に考えてみますと、4つがあるかと思います。一つは、過去の現象を知って私たちの時間スケールを自然に合わせる、という活動です。二つ目は、地球をより広く知ることです。カムチャッカ半島の事例がそういうことを言っていると思います。それから三つ目は想像することです。これは私たちの言葉で言うと、思考できるようにすると同じ言葉だと思います。たとえば、今、雪が屋根の上にあります。それが氷になってきました。それはゆっくり動きます。そして、氷がゆっくり流れる、というのは氷河というわけです。氷河が、氷が流れるならば、もし外縁が地表にあればどうなるのか、外縁は流れるでしょう。これを外縁氷河というわけです。外縁が流れるならば石が流れるでしょう。つまり石も高いところから低いところにゆっくり流れるはずだというように考えるんです。ただ、その速度が違うわけです。そういう風にいろんなことを想像する、という作業も非常に大切だろうと思うわけです。それから四つ目が、自然現象を記録し、考えることです。例えば、3.11で沿岸に津波堆積物が残されました。津波堆積物を見て、「あ、これは津波が発生したんだ」という風に考えていけないといけないわけです。今回の津波堆積物の前にも実は類似した堆積物がいっぱい見つかったというわけなんです。そういうのを見たときに、私たちはここに津波堆積物があるっていうのを記録して、その意味合いを考えないといけないんだと思うわけです。つまり、自然の中に手掛かりはいっぱいある。それを記録して意味を考えるという作業が非常に重要だと思うんです。釜石東中のグラウンドあたりで調べてみますと、津

波堆積物の厚さは、厚いところで大体15cmくらいなんです。ところが津波そのものは3階の校舎に入っているわけで、残った堆積物は10cmくらいです。厚さが全然違うんです。3階に運ばれた砂が今、目の前にこのくらいの砂の層として残っているわけです。私たちはそういう砂の層を見ることで、3階まで届くような津波が来たんだということを考えないといけない、というわけです。特に過去の巨大なものはそういう形で考えていかなきゃいけないということです。もう3000年前になると文字がありません。そうすると、何を調べるのか、と言いますと、地形と地層です。ここに手掛かりを求めることになるわけです。その中から過去の巨大な現象を読み解くことが重要であるという風に考えるわけがあります。では、こういう現象にはどういう風に備えたいのか、ということです。先ほど加藤先生の方から津波に対して教えをそのまま守って最善をつくして逃げた。それがすべての成果につながっているというお話がありました。私もまったく同感だと思います。全力を挙げて最善を尽くすこと、そしてその力を付けること、だと思います。最善を尽くすところが問題です。津波は現象が一つです。津波って何かと言えば、海水の塊が高速で陸に上がってくる現象、これが津波なわけです。ただ、自然災害はもっといっぱいあります。火災があります。火災に対する知識もないと最善を尽くせないと思えるわけです。そういう意味で、いろんな基礎を築いたうえで最善を尽くさないといけない。すなわち、力を付けた上で最善を尽くさないといけない、ということになるかと思います。これが備えだろうと思います。津波など、火山もそうなのですが、とにかく逃げることなので、津波はいかに素早く逃げるか、火山の場合はいかに最大噴火を避けるか、避け方が違うだけにして、その辺を理解しておけばいいのだろうと思います。もうひとつ別の側面で考え

てみたいと思いますが、想定外の現象がもたらしたものは一体何かといいますと、自然の方から言いますと、新たな発見をしていること、自然の理解を進めていることです。想定外とは巨大なものですから、当然大きな災害が発生することもあります。そういう一方でこういう新たな理解が進んでいく、という側面もあるということです。繰り返しになりますけれども、今本当に大切なことっていうのは、地球そのものを広く知る、そして過去の古い時間を知る、ということだと思います。人がやれることは3番目と4番目。想像することと、記録して考えること、この二つではないかと思っています。ちょっと早くなりましたけれども、今日お話ししたいところは以上です。ありがとうございました。

新沼：土井先生、ありがとうございました。想定外の自然現象、特に火山活動についてということでした。初めてお聞きになった内容がたくさんあったのではないかと思います。今の土井先生のお話についての感想、あるいは御意見等、ぜひございましたらお出しただければと思いますが、いかがでしょうか。

塚野：非常におもしろい御発表ありがとうございました。私は心理学が専門なのですが、人間が何を想定するのか、なぜ想定外を軽視するのかということを考えたときに、もちろん先生がおっしゃったことそのままなんですけれども、心理学的に少し捉えてみますと人間というのは自分の経験の範囲の中で実感の世界を形成していると思うんです。よほどまずいことが起きない限り、心理学では現状維持バイアスって言い方をするんですけれども、まずは自分の現状というものを固定してしまっているということで、自分の経験の範囲でよほどひどいことが想定されない限りは今を肯定してしまうということがあるんです。そうしますと今回のように地震や火山のように

時間スケールが非常にずれているようなことになりますと、やはり実感の世界から離れてしまうので現状維持バイアスが働いてしまうんじゃないかと、そんなことが関係しているんじゃないかと思います。ただ、今回は映像の記録がだいぶ残りました。これは経験の範囲外であったとしても人間の実感というものを伴う可能性がありますので、今後はかなり違ってくるんじゃないかと思った次第でございます。

新沼：私も塚野先生のお話を聞いて少し思い出したことがありまして、自分の身の上には今テレビでやっているような事故や事件と言うものは起こるはずがないということを常に思っているんだそうです。それが正常化の偏見というものですが、そういうことで暮らしているために、なかなか想定外というものは持ちにくいのだという話は聞いたことがあるんですが、そういうことをぜひ含めて土井先生お願いします。

土井：やはり防災の方で正常化の偏見が話題になっていることと思います。例えばですけど、この教室でちょっときな臭いにおいがしたとしますね。そうするとみなさんどうするかな、というわけですね。だんだんきな臭いにおいが強くなってきたとしますね。どうするでしょうね。私の言いたいところはそこにありまして、たぶん最初のへんは臭うな、変だなと感じると思います。だんだん強くなってくると全員がきな臭いと思うとたぶん隣の人を見るんだと思いますね。こっちは人は大丈夫そう、あ、こっちは人も大丈夫そう、なんだ大丈夫か。たぶんそう思うと思いますね。そうやってどんどんどんどんこの会場に煙が充満して行って行動を起こす人がなかなか出てこないだろうと思うんです。そのうちにこのあたりからちよろちよろっと赤いものが見え始めたら多分みんなどっと逃げ始めると思

うんですけれども、そういう風な時、どの時点で素早く行動できるのか。自分自身が行動できるのかってというのが防災の一番だいじなところじゃないかなと思ってまして、心理的には正常化の偏見があるし、バイアスがかかってくるだろうと思います。別の例を出します。非常ベルが鳴ったとします。あれ、何かな、ベルが故障したのかなってふつうは最初に考えますよね。でも煙が見えないとなれば多分そのまま居ると思います。その時にどなたかがパーっとひとりでも出て行って外を確認して、火や煙が出ているか確認できるかどうかなんじゃないかな、と思うわけです。多くの人はその行動をなかなかできないと思います。こんな状態でそんなことやったら恥ずかしいなってまず思うだろうし、隣の人の顔を見れば、なんとなく安全なような顔をしていますので、ああ、じゃあ安全なのかな、と思うでしょう。そういう風にして事態が進むように思うんです。津波とか、自然災害もそうで、定点ができていく様子はまさにそれなのかなと思います。周りに人がいるから安全なんだと思う、多分そのように思います。そういう風にして、大人は比較的年数を経ていろんなものを見ているという自信がありますので、その経験の中で安全というものを仮想的に作ってしまうんじゃないのかなと思います。子ども達がなぜ逃げられるかという、こういうものが無くて教えられたものそのものを実行できる、行動に移せる、ということがあるので逃げられるように思うんですね。大人は逃げられない、むしろ危険に近付いているように思うんです。そういう風にして、大人バイアスみたいなものがかかってきまして、塚野先生がおっしゃったことと同じになってしまうかもしれませんが、経験をもとに勝手に仮想的な安全なところを作り始める。これが雲仙・普賢岳の定点という場所であると思うわけです。行動をいかに起こせるかということですね。僕はそこが分かれ目なの

なと思います。ちょっときな臭くなったら「先生、きな臭いよ」と声を上げる。外に確認に行く。そういう行動を起こせるかどうかの基本かなという風に思いますけれども。あまり答えになっていないかもしれませんが。

新沼：ありがとうございます。今、土井先生から定点という話がありました。定点をどう決めるか、決めてしまうかということですね。実は私の実家も大船渡にあって、今回の津波で全部流されてしまいました。近所に伯母が住んでおりました。87歳の伯母でした。その伯母は、津波が来るという放送を聴いてすぐ川に見に行っているんです。そして流されているんですが、その伯母の87歳までの最大の津波の経験は自分の家の前まで来ているチリ地震津波だったんです。その経験値が最大だったので、その経験値が邪魔をしてしまった。自分で勝手に定点を決めてしまう。したがって、おそらく自分の経験の中で最大のものが定点を決める一つの基になっているのかなと思いました。私も実家が流されたって聞いたときにそんなはずがないと思っていました。なぜかというと、チリ地震津波の時に自分の家の庭まで来ているんですよ。それ以上高いのは来るはずがない、という思いが常にあった。やはり人間というのは経験値の中で定点を決めてしまうんじゃないかって、話を聞いて思ったんですけれども、みなさんはいかがでしょう。今回の場合はまさに経験が邪魔をしてしまったと思うのですが、皆さんいかがですか、その辺については。

加村：滝沢村社会福祉協会の加村と言います。私が被災者の方に寄り添う仕事をやっている中でいろいろ話を聞かせてもらっています。今の定点については2点ほどありまして、駄目だった例は山田町の大沢区。やっぱりちょっと高いところに地域の方が集まって海を見ている。それが堤防を越えて、津波が襲ってき

てほとんどの方がそこで流されていて、ちっちゃな集落ですけどもそこで20数名流された。助かった方は降りてきて、近くに祠があるので走って、濡れながらも助かった。この旦那さんは津波の時はそこにはいなかったんですけども、山を越えてどうにか戻って話を聞いた。その時言った言葉は、「ただ、みんな見てたんです。」という言葉でした。それから、定点を打ち破った例は、山田町の大沢区。地震があって、地域の方が前の消防団の副団長をやった方の家の庭先に集まった。その消防団の副団長だった方は、「今回の地震は大きい。地震も大きいはずだ。ここにはだめだ、みんな逃げよう。」ということで、高台に逃げて全員助かった。ちなみにこの消防団副団長の方は明治、昭和に家が流されているんです。それで頑張って、3代かけて300m山際に家をたてたんですけども、そこも今回は無くされた。このような事例を聞いています。ですから、そこで誰かが「危ないから逃げよう」と言えるかどうか、そのための勉強をさせてもらえました。以上です。

新沼：ありがとうございます。土井先生、今のことについて何かありますか。

土井：消防団の副団長の方の感性はすごいなと思いました。つまり、自分が感じた地震の大きさを、これはいつもより大きいと判断出来たってところは素晴らしいと思います。しかも、だから津波はもっと大きいという風にさらに結び付けていったところ、どのようにそのような感性というか感覚を磨いてきたのか、その方から伺いたいくらいです。最高の証拠は自分の体験した現象そのものです。地震の大きさをそれで判断できるっていうのはまさにここでお伝えしたかった最善を尽くすための力を身に付けた方だと思います。そういう力が大人にどういう風に付けられるのかはポイントなのかなと思うわけです。

ね。子ども達は素直で、先生に教えてもらってれば、それをそのまま行動に移せる人達なんですよ。大人は行動に移せないんです。さっきの事例じゃないですけど、年だかわからないけど行動に移せない。そんな中で地震というシグナルをそのまま正確に捉えて行動に移せるという意味で、そういう人が大人の中に出てこない大人が助からないのではないのかなと思っています。ここは教育学部なので、学校との関係で言うと生徒ないし学生と保護者、釜石のような理想的な場合は地域が連携して結びついているわけです。だから、子どもの素直さを大切にして、保護者の津波や自然災害に対する感性を磨くというような形は大切だと思うんです。子どもを中心にして保護者が育つ、と言ったら語弊があるかもしれませんが、そういう感性を磨くことは非常に大切だと思います。私はむしろ、今回の3.11の状況を見て感じるのは、大人の方に問題があるなと強く感じるわけです。大人の方が見に行ってしまう。子どもにはすぐに逃げなさいと教えているんですけども、大人の方は見に行くわけです。そういう人もいるわけです。ここの部分をどうすればいいのかっていうのを考えていかなければいけないと思うわけです。これも答えになっていませんけど、そんな風に感じています。

新沼：ありがとうございます。あと一人くらい何かございませぬか。感想でも結構です。

大河原：今日はどうもありがとうございます。過去のことを調べて、それを参考にするのはすでに想定しちゃってるので、あまりあてにならないということがよくわかりました。所で、海岸ですと津波ですけども、この辺ですとやはり岩手山の爆発ですとか想定するんです。私は滝沢村に住んでいて、役場の後ろに山が見えます。さらにその上に岩手山が見えるので、役場の後ろの山が堤防になって大

丈夫だと想定しているんです。それは非常に危ないことだと。なぜかという、昔、諸葛川に岩手山の泥流が西根の方からずっと流れてきているんです。ただ、すごい爆発が起きたときには危ないのかなと想定するんですけども、いかがでしょうか。

土井：まず火山の方からお話ししますが、場所的には流れものが火山っていうのは一番怖いわけです。火砕流、火山泥流、要するに流れてくるものがこわい。高速で、しかも温度が高い場合もある。逃げられないんですね。その意味では先生の住んでおられる場所は比較的安全だという風に思われます。ただ、後ろの山を乗り越えたときもあるものですから完全に安全とは言い切れませんが、比較的安全な場所だと思われれます。火山に対してはそんなところですね。もうひとつの災害があって、活断層の問題なんですけれども、家の下にたぶんあると思いますので、その辺は別の意味で考えないといけないのかもしれませんが。私も実は自分で自分を笑ったんですけども、家を建てて、地質調査したら、自分の家の下に大きな活断層があるなということが自分の調査で分かりまして、これはどうしようもないなと思っていました。場所は八幡平のすその盆地に変わるところなんですけど、活断層があり、その上に家をたてておりまして、なんて間抜けな男だと、それも自分で活断層があることを証明して何になるんだと状況でありまして、お互い御愁傷さまということで終わりたいと思います。

新沼：はい、ありがとうございました。土井先生には人間の一生のスケールで自然現象を見たり理解したりすることは無理なんだというお話をいただきました。しかも我々の興味を喚起するようなお話をいただきました。本当にありがとうございました。それでは最後になりますけれども、ここで講師の先生方と参加

していただいた皆様方に謝辞をセンター長から申し上げます。

センター長：土井先生、加藤先生、今日はどうもありがとうございました。先生方から多大なる示唆をいただきました。子ども達が非常に純粹で、大人は知識と経験が邪魔をしていることもわかりました。しかし、その子どもを教える教師が素晴らしいですね。我々はその教師を育てる場所にいますのでこれからもより良い教育に邁進してまいりたいと思います。皆さんも今日言われたことをぜひお持ち帰りになって、いろいろな場面で生かしていただけたらな、という風に思っています。今日は大変ありがとうございました。

新沼：最後に一つ連絡がございます。記念写真を黒板の前のあたりで撮りたいと思いますので、余裕がある方にはご参加いただければと思います。これをもちまして、教育講演会を終わります。どうもありがとうございました。